290.1-N83ウ
1200500732726

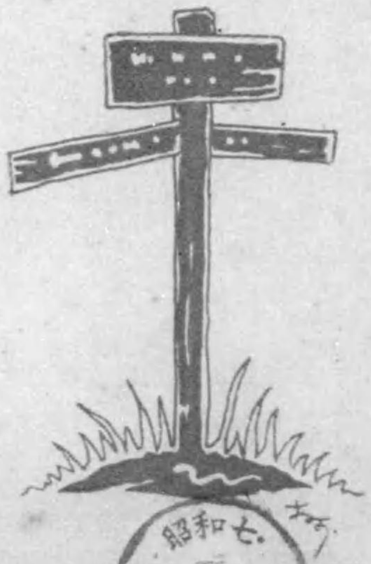
始

外88
之

西亀正夫著

290.1
N83

郷土地理の調べ方と實例



昭和七年

厚生閣版

263.6-168

例　言

一　本書は今夏廣島市に開催せられた、廣島教員養成所主催の講習會に於ける講習の草稿を整理補足したものである。

一　昨今鄉土教育に關する書籍雜誌の刊行頗る多く、幾分食傷の感なきを得ない。已に清算を叫ぶ人さへある。この時にあたつて本書を世に問ふは聊か蛇足の評もあらう。

一　然り鄉土教育は已に議論の時代を過ぎて實行の期に入つて居る。併し愈〻實行して見やうとすると、さて何から手をつけてよいかに迷ふ。高遠な議論は聞き飽いたが、着手の箇所を示したものは少い。

一　鄉土教育は先づ鄉土を知ることから始まる。鄉土を知るとは鄉土の生活を調査研究することである。何を如何に調べるか、本書は實にその着手の箇所を指示することを目的とした。

一　本書によつて鄉土の調べは直ちに着手することが出來る。それが出來た上で眞にその鄉土

に即した教育の方案は生れよう。否調べることそれ自身が已に極めて有效なる鄉土教育の一部である。

一　眞の鄉土教育が徹底し、眞摯なる鄉土愛護の精神の培はれんこと、これ著者の切なる念願である。本書が多少ともこの目的に役立つならば、幸これに若くものは無い。

昭和六年十二月

著者

鄉土地理の調べ方と實例

目次

鄉土地理とは何ぞや …… 一
鄉土の意義と範圍 …… 一
教科としての鄉土 …… 八
地理學と鄉土地理 …… 一〇
鄉土教育と鄉土地理 …… 一三
村を見る目 …… 一七
鄉土の見方 …… 二〇
見る人の態度 …… 二〇
見る人の素養 …… 二五
家の地理研究 …… 三〇

家の地理學……三〇
家の立地研究……三三
ある家（實例）……三四
家の構造……三六
ある家の構造（實例）……四〇
家の環境……四二
鄉土の立地研究……五一
地形と位置……五一
水の制約……五四
地面の利用……五六
交通線……五八
ある村の立地研究（實例）……六〇
聚落の形態……六四

村の姿……六四
町の形……六六
幹と枝……六八
垂直の形……七一
ある町の垂直形態（實例）……七三
史的研究……七六
鄉土史の着眼點……七六
何をどう調べるか……七九
ある村の歴史（實例）……八四
人口……八八
人口の總數……八八
人口の構成……八八
人口の變動……九五

密度と飽和……九
ある村の人口(實例)……一〇
環境……一〇
微地形……一〇
微地質……一一
微氣候……一四
早朝の氣温分布(實例)……一八
開拓景……二〇
生産地域……二〇
不生産的占有……二五
都市の開拓景(實例)……二九
破壊的利用……二九
經濟形態……三三

職業構成……三三
生産力……三五
主要物産……三八
特産物の研究(實例)……四〇
農業……四四
新開地の一軒家(實例)……五一
櫻島の農業形態(實例)……五三
工業……五四
工場の位置選定について(實例)……六〇
漁業……六六
商業……七五
木炭商(實例)……七七
生活態様……九九

衣食住……一六九
水と燃料……一七四
道具……一七八
風俗習慣……一九九
社會組織……一八五
文化……一八七
子供の生活……一九二
衛生……一九四
或漁村の衛生狀態(實例)……一九七
交通景……一九八
生活程度……二〇五
資產……二〇五
土地所有關係圖(實例)……二〇九

收入……二一一
生活費……二一四
生活程度と貧乏線……二一八
ある農村の生活程度(實例)……二一九
公共經濟……二二二
地圖について……二二六
地形圖……二二六
重ね地圖……二三〇
兒童の描圖……二三二
兒童に課する鄉土地理調査案……二三九

郷土地理の調べ方と實例

郷土地理とは何ぞや

郷土の意義と範圍

郷土といふ言葉は色々の意味に用ひられてゐるが、郷里とか故郷とかお里とか郷國・母國などいふ言葉とは幾分違つた内容を有するものであつて、獨逸語のハイマート(Heimat)と大體同じものと解するのが妥當であると思ふ。ハイマートはこれを語源から解釋するとハイム(Heim)即ち寢床といふ語から起つたもので、休憩する場所、生活の本據といふ樣な意味から自分の家を指す言葉となり、更に

それが擴張されて自分の家を中心とする周圍の人里を指す樣になつたもので、狹い意味では所謂近所近邊、廣い意味では郡・縣・州をも指すことゝなつてゐる。

郷土といふ語もこれと同樣に、自分の家を中心とする周圍の或範圍を指すことゝすればよいと思ふ。ところで自分の家と云へば自分の生れた家、育つた家、住んで居る家といふ樣に色々あるが、それ等のどれもが同一の家である場合には問題は無いけれども、生れた家と育つた家とが別であり、育つた土地と現在住んでゐる土地とが別である場合も多い。かゝる場合にどれを郷土とすべきかゞ問題になるが、それはその本人の感じの上から云つて、最も親みの深い土地を郷土とすればよいと思ふ。生れた所には一年しか居ないで、他に轉居して數年を經たといふ場合には、その人にとつては生れた土地はあまり大きな執着を感じない。後に更に行つて見ない限りは、その姿さへも思ひ浮べることは困難である。又たとひ數年間育つた土地と雖も、その後轉居して更に十數年を經た人にとつては、育つ

た土地はたゞおぼろ氣な幼い記憶が、小川・道・岸邊、田の畦、小山の麓と云つた樣な形で眼底に殘り、幼な友達の誰彼が夢の樣に腦裏を往來するといふ丈けで、その友達は四散して行方も知れず、その山川は形をかへ姿を變じて昔の面影さへも無いといふ樣なわけで、淡い憧憬の對稱にはなるとしても眞にわが愛する郷土といふ心持は起らない場合もあり得る。

そこで『最も親みの深い』土地といふ言葉を使つたのであるが、或場合には甲地で生れ乙地で育ち、丙地に住んで居るといふ樣な場合、甲乙丙の三地に各同じ程度の、若くはあまり違はない程度の親みを有することもあるから、そうした人にとつては郷土が二つ三つあつても差支ないことであるし、第一の郷土、第二の郷土といふ樣に幾分順序をつけ厚薄を區別しても差支ないと思ふ。何でも角でも生れた土地、育つた土地といふ言葉に拘泥し、一つしか郷土といふものはあり得ないものゝ樣に考へるのは偏狹に過ぎる。生來幾度か住居を轉じた人にも、現に

最も親みの深い土地が一ヶ所位はあり得る筈である。郷土は幾つあつてもよいが、郷土を持たないといふ人のあることは望ましくない。それはその人のためにも、又その人を抱擁する社會のためにも悲しいことである。

郷土を以て田舍と同じ意味に解する人もある。郷土文化とか郷土藝術とか云へば、それは田園文化だの田舍藝術だのと同じ内容を意味する樣である。併しそれでは純都會人には郷土は無くなる。勿論今日、少くとも日本に於ては、都會よりも田舍に郷土を持つ人の方が多いには相違ないが、併し東京銀座の目貫の通りを郷土と意識してゐる人が無いとも云はれまい。人口の都市集中、田舍の人の向都離村といふことは著しい現象であるにしても、今日の都市住民の悉くが田舍を郷土としてゐるわけでは無く、たとひ田舍に生れて都會に出て來た人にしても、その生れ故郷の記憶は次第に薄らいで、却つて現在住んでゐる都會の方に多くの知識と關心とを持つ場合も少くないのである。

ところで郷土の範圍をどれだけに限定したらよいか、これが又中々困難な問題である。自分の郷土と感ずる土地が、極めて狹い區域に限られて居て、その周圍が悉く無人の地域でとり圍まれてゐる場合には、その範圍は極めて明瞭であるが、廣い〳〵區域に亘つて住居の連續して居る場合には、これが範圍を明確にすることは蓋し不可能であらう。多くの田舍は、一つの部落又は村が、耕地や山林にとりまかれて島の樣になつてゐるから、比較的簡單明瞭であるが、京濱とか阪神とかいふ樣な人類の一大集團にあつては、これを一つの郷土とするにはあまりに廣く、これを區分するには一定の標準なるものが見出し難い。

郷土が『自己の家を中心とする周圍の人里』である以上、必ずや郷土なるものは人類の一集團であり、郷土を同うする人たち何人かの集りでなくてはならぬ。併しながらそれは決して有機的な團體であると限つては居ない。否寧ろ半意識的な集合に過ぎない場合が多い。故に甲の人の郷土と乙の人の郷土とが、互ひに喰

ひ違ひ重なり合ふといふ樣な場合もあり得る。都市に於ては殊にそれが著しい。そしてその郷土の周緣はボカシになつて居て、他の郷土との間に漸移するのである。

面と面との接觸といふことは、郷土の限界を定める一標準となる。たとひ姓名はお互に知らなくても、所謂面識だけはあるといふ範圍、それは田舍にあつては一村一郷といふものと一致する場合が多い。見知らぬ人、見慣れぬ人が村に入り込めば、すぐに村人の目をそばだゝせ、甲から乙へと話し傳へられる。それは親しい一群の中への異物の慕入として意識せられるからである。かゝる一群の人たちは、お互に同類の意識を有する。言語・風俗・習慣・道德を等しうする一群としての意識がある。一山越せばその先の村は、已に幾分か違つた方言が用ひられ、年中行事を異にし、日常衣食の樣式に小異があり、家の建て方にも特色が見出される。これ即ち文化的方面から見た郷土の限界である。併しこの種の限界は都市

の内部にあつては頗る明瞭を缺く。

大都會の殊に住宅區域等にあつては、轉居が頻々として行はれるためにお互の面識といふことさへも中々に得難い。併しそれでも軒を連ね塀を接してゐる人たちには、共同の關心といふことはあり得る。平素は出會つても口を利かない樣な間柄でも、火事だとか急病人だとかいふ場合にはお互に助け合ふのが人情である。『京の親子に隣をかへるな』といふ諺の通り、隣保ほどほんとに力になりアテになるものは無い。それが小さい乍らも郷土といふものゝ芽生えとなる。

更に進んでは協同の組織である。五人組、十人組、門内(かどうち)、町内、講中などといふ樣な種々の名目の下に協同の組織が作られてゐる。それは單に社交的の組合であつたり、或は自治體の補助機關といふ樣な政治的なものであつたり、或は水利組合とか產業組合とか云ふ樣な經濟的のものであつたり、或は氏子とか門徒・壇下などいふ宗教的のものであつたりするが、何れにしてもこれ等は郷土といふも

のゝ一單位となり得る性質のものである。

田舍にあつては、一つの小さい町が中心となつて、その周圍の若干の村との間に密接な經濟的關係を保つてゐる場合が多い。村の人たちは米や麥をその町に賣りに出て、町から肥料とか反物とか、色々の日用品などを買つて歸る。町の商人はこれ等村人の購買力によつて支へられてゐるといふ有樣で、兩者互に相助けて一つの團體を形成する。これをアメリカでは都鄙共同體(Rurban Community)と云つてゐる。これは少し廣い意味に於ける郷土と見てよからうと思ふ。

教科としての郷土

郷土を學校に於ける一教科として見るとき、その範圍に就て自ら定まる一條件がある。それはその學校に於ける全兒童、少くともその個々の學級に於ける全兒童の共通の郷土でなくてはならぬからである。無論極めて少數な特殊の環境を有

する兒童については、これを犧牲として無視する場合もあり得るだらうし、又或場合には一人一人の兒童に別々に自己の郷土を認識せしめる樣な場合もあらうけれども、大體に於て全兒童はお互に郷土を等うする一團體であり、お互の面識、共同の關心、同類意識及び協同の組織を有するものである。故に手取り早く云へば、その學校又はその學級の兒童の居住範圍、即ち通學區域なるものはその學校に於ける教科としての郷土の範圍として有意義である。

勿論それも學校の大小、都市と村落、小學校と中等學校等の區別によつて一樣に定めるわけには行かない。或場合には學校を中心とする極めて狹いその周圍とせなければならないこともあらう。或は一日に往復し得る範圍だとか、日常目擊してゐる範圍などいふ樣な、特殊な條件を定めて限界を立てねばならぬこともあらう。又兒童の年齡と知識とが進むに從つて、その眼界は大きくなりその交渉する範圍は廣くなるから、學年によつて範圍に廣狹を生ずることも當然であつて、

小學校にあつては町村、中等學校に於ては府縣を鄕土の範圍とすべしとの議論もあるわけである。

幼兒は自己の家族以外に他人と接觸することによつて、始めて自己の家族といふものを明瞭に意識するものであり、長じて他町村の人と交るに及んで自己の町村といふものが明かに腦裏に描かれる樣になる。縣外に出て他府縣人のみと交際する樣になると、自分の府縣といふものが自分の鄕土であることを强く感じ、何々縣人會などいふものが出來てお國訛りを語りお國自慢の花を咲かせる。故に世界を股に飛び廻る人には、鄕土は即ち祖國であるといふことにもならう。然らば即ち學校の種類と地位と、その包容する兒童の環境を考へたならば、鄕土の範圍をどの程度に限定すべきかの問題は、自ら解決が出來るであらうと信ずる。

地理學と鄕土地理

輓近地理學の進歩は極めて目覺ましいものがあつて、十年前に比べると全く隔世の感がある。地上の現象を羅列することを主として居た時代は已に跡方もなく去つた。『地球の表面と人類生活の狀態とを研究する』と云つた敎則の文句をそのまゝの、二元的な地理學といふものも已に過去のものである。自然と人類との關係、その間に存する法則、所謂地理的理法の發見を目標とした時代もあつた。併し今ではそんな原則はあり得ないものだと考へられ、又たとひ多少原則に似た樣なものがあるにしても、それを發見抽出することのみが地理學の目的では無いと考へられる樣になつた。

然らば地理學の目標は何であるかと云ふと、地上に於ける自然及び人文の錯綜した現象を、その地域の渾一的な景觀として研究し、その中から人類が如何に自然を征服し利用し、如何に自然から制約せられ影響せられ、如何に自然に適應し順應してゐるかといふことを抽出するのである。

自然に對する人間の反應(Response)適應(Adaptation)若くは調整(Adjustment)といふ現象は、時と處とによつて大に異なるもので、その間の關係は簡單な原則で律することは出來ぬ。一例を擧げると寒い氣候に對する人間適應の樣式にも色々あつて、日本人は手先足先を暖める火鉢・炬燵といふものを工夫し、西洋人は室全體を暖めるストーブを作り、朝鮮では溫突が考案せられた。又朝鮮人の防寒衣は和服よりも遙かに巧妙であり、エスキモー人は脂肪的食物を多喫することによつて體溫の增加をはかつてゐる。昔は水力發電と云へば瀧が無くては出來ないものと考へられてゐたが、後には急流の部分に水路を設けて落差を得ることが工夫せられ、更に最近にはダムを作つて峽谷に水を溜めることが考案せられる樣になつた。行燈からランプ・電燈と變化し、紙燭や種油が石油となり電氣となつた如き、自然そのものには變化は無くても人間のこれに適應する樣式は日進月步、變化發展して已まないものである。

故にジョーン(Jone)は云つた。地理學は人類の生態を論ずる科學である(Geography is the science of Human Ecology)と、人類がその環境の中にあつて、どんな適應樣式をもつて生活してゐるかといふことを研究するのが地理學である。故に鄕土地理と云へば『鄕土に於ける人類の生態』即ち鄕土人の生活態樣の研究であると云へばよいわけで、一般地理學はこれを地球全體について研究し、鄕土地理はたゞ鄕土と云ふ限られた狹い範圍について研究するといふだけの相違である。即ち鄕土地理は地誌の一部である。限られた地域の地誌である。決して地理學の一分科として鄕土地理學なるものが存在するのでは無い。

鄕土教育と鄕土地理

鄕土主義の教育とか、教育の鄕土化とか云ふことは、近來殊に目覺ましい一つの運動となつて來たが、一體鄕土といふものにどれだけの教育價値があるかと云

ふと、それには二つの方面から考へる必要がある。ペスタロッチも云つた樣に「自分の郷土を理會せぬものが、何で自分の見ない他人の郷土を理會することが出來よう」。直觀は教育の基礎である。郷土史は國史の基礎となり、郷土理科は自然科學の基礎、郷土地理は地理科の基礎である。あらゆる教育の內容がこの直觀の基礎の上に立つて、擴充され發展されて行かねばならぬといふことは、ザルツマンなどもやかましく論じてゐることで、今更こゝに取り立てゝ云ふ迄もない。この意味に於ける郷土地理の如きは、今日これを取扱つてゐないものは殆どあるまいと思ふ。

併し郷土の教育的價値には今一つ情操的方面がある。郷土は人格の誕生した所であるから、人間の精神的根本感情は郷土に根ざしてゐるものである、故に郷土は人格の根本感情の養成、個性の發達と情操陶冶との基礎として重大な使命を有するものである。郷土に愛着し、郷土を擁護するといふ感情と意志とが、全人格

の基礎として先づ養はれねばならないとするのである。これが現代の新教育思想に於ける郷土の價値觀である。郷土を以て單なる教育の豫備的な手段と見るのでなくして、郷土それ自身を個性の要素と認め、教育の對象とし、郷土そのものを以て直接被教育者の人格の根柢に強い感情を植え付け、堅い意志を養つて行かうとするものである。

そこで新しい郷土教育を施さうとするには、先づその郷土なるものを明かにしてかゝらねばならぬのであるが、それには郷土を縱に見る郷土史と、これを横に見る郷土誌との二つがあり、郷土誌は更に郷土博物、郷土地理といふ樣に分類することが出來る。ところでこれ等の中で最も重要な地位を占めるものは郷土地理である。何となれば郷土博物は單なる自然界であり、郷土歷史は過ぎ去つた人事のみであるが、郷土地理の中には自然と人事との兩者が一つの渾一體として認識され、現在を主とすると共に過去を顧み將來を豫想する縱の研究も含まれるから

である。

即ち郷土愛護の精神といふものは、單なる郷土の博物や歴史では充分養ふことは出來ぬ。郷土に尊重すべき動植物の群落があつたからと云つて、それのみで郷土愛護の精神を養ふには力が弱い。郷土の偉人や傑士を列擧することは、感奮興起の一資材とはなるが眞の郷土愛護の精神は養はれない。

然るに郷土地理は、前にも云つた通り郷土に於ける人間生活の態樣を研究するのである。自然に對して人間が如何に順應してゐるかを見るのである。そこにあまりにも自然の制約を受けることが大で、自然の前に慴伏してゐる慘めな人間の姿があらはれたとするならば、それはその郷土の文化の低級なことを示すものであつて、これを改良し更正して一層高度の順應樣式を案出し、自然を修正し、補導して人間の生活を一層向上發展せしめようとする努力、それが眞の愛郷の精神であり、そこから郷土擁護の實際運動も生れるわけである。故に曰く、郷土地理

によるにあらざれば眞の郷土教育は行へるものでは無いと。

村を見る目

眞の愛はそのものを正しく知ることから始まる。知らずして愛するのは盲目の愛であり獸的の愛である。郷土愛は郷土を正しく知ることを第一の要件とする。故に郷土教育は先づ兒童をして正しく郷土を見せしめねばならぬ。『村を見る目』を養はねばならぬ。

誰でも自分の村を見ないものは無い。併し正しく見てゐるかと聞かれたら『然り』と即答し得るものは少ないであらう。科學的な態度をもつて鋭いメスを振ひ冷靜な客觀的立場に立つて正しい批判を下すといふことは、言ひ易くして行ひ難い所である。併し難いけれどもこれでなくては眞の愛郷心は生れない。

『春は花咲き鳥歌ひ、秋は滿山に錦繡を織り、月の夕暮露の朝、清流四時に碧に、

瑞氣天地に滿つ』、などと云つた樣な美辭麗句を並べて郷土の風景美を稱へたり、偉人傑士の傳記を列ねて『容貌魁梧志氣凡ならず、膽斗の如く氣世を蓋ふ』とか、『才智縱横水の流るゝ如く、氣象豪邁膽略世に卓絶す』などと、感奮興起を促し立てゝも、結局安價な憧憬をそゝるだけで、その購ひ得る郷土愛は所謂舐犢の愛に過ぎない。かゝる動物的の愛は却つて郷土を殺すもので、百害あつて一利なきものである。

村を見る目、それは自然が人間に及ぼす影響を測定することであり、人間が自然に順應せる態樣を明かにすることである。かくて村を正しく見た上で、これを他の地方と比較して順應樣式の優劣を知り巧拙を判じ、これを過去の生活と比べて進歩發展の跡をたづね、而して始めて今後に於て、如何にすれば郷土は發展するか、如何にすれば進歩するか、順應の樣式を科學化して最も高度の文化段階に上すにはどうすればよいかといふことがわかる。それこそ眞の愛郷心である。酸

いも甘いも嚙み分けた理解ある男性的な愛である。村是もこゝから生れ、産業是もこゝから割り出されてこそ、ほんとに郷土人の福利が增進せられるのである。

敢て斷るまでも無いが、郷土を愛するとは郷土に執着するといふことでは無い。郷土が人口過剩の地ならば去つて他郷に赴くのも亦郷土を愛すればこそである。愛郷心と向都離村とは必ずしも矛盾せず、愛國心と植民精神とは必ずしも背馳しない。

郷土の見方

見る人の態度

郷土を如何に見たらよいか。どんな態度で研究したらよいか、先づそれについて簡單に述べて置きたい。郷土を見るには、先づ何よりもこれを全體的に見るといふことを忘れてはならぬ。郷土といふものが可成り廣い範圍に亘つてゐる樣な場合、地理的に見て幾つかの區に分けねばならぬ樣な場合はあり得るが、區分はしても常に全體を顧慮しつゝ研究しなければならぬ。或村には農を主とする部分と漁業を主とする部分と、日用品など賣り捌く小店の集つた部分などがあつたりするが、そういふ場合にはそれ等特色ある各區について仔細に研究すると共に、常に村全體を顧みて農區と漁區との位置の關係とか、農區と商區との地勢の相違

とか、その各區の間の相互關係や、各區の相違點の比較研究といふ樣なことに着眼しなければならぬ。

又研究の便宜上地勢とか氣候とか、或は產業とか交通とかいふ樣に分析することは當然であるが、それにしても常に全體といふことを忘れてはならぬ。分析は綜合のために行ふのであるから、綜合をしないで分析のみしたのでは、得られた材料は支離滅裂で、そこから何等の結論も生み出し難いであらう。殊に各事象の相互關係といふことは、人類の順應態樣を見るに最も大切な事柄であるから、地形を見る場合には同時に開拓景や聚落景にも注意しなければならないし、生活樣式を調べる場合にも、亦氣候とか土質とかいふことを顧慮することは忘れてはならぬ。

第二に注意すべきことは常態的といふことである。どうかすると珍奇な事柄には人の注意を惹き易いために、知らず〳〵變態的なことに力瘤を入れることがあ

る。史的方面にしても偉人傑士の出現といふ樣なことは寧ろ變態的で、研究の價値が無いわけでは無いがそれよりも村の人たち一般の生活史の方がより大なる價値を有する。又生物的方面にしてもやれ二股の筍が出來たとか、三本脚の犢が生れたとか、そんな變態的な事には大きな意味を有するものでは無い。たゞそれがその地に特有の事象で、他の地方では殆ど見ることが出來ないのに、その地に於てのみ度々起るといふ樣な事柄であるならば、それは已に變態的な事象ではなくして、その地に於ける常態なのであるから、充分これを研究して見なければならない。

旱魃とか洪水とか、地震とか傳染病の流行とかいふ樣なことは、もとより一時的偶發的の事象であるから常態とは云へない。併しそれだからと云つてこれを研究から除外せよといふのでは無い。常態でなくてもそういふ事變によつて如何に常態が攪亂せられるかといふことが研究題目となるし、又そういふ事變が如何に

して起り如何にして擴がるかといふことは、何等かその地に即した常態的な原理が存在することもあるからである。昭和五年の北伊豆地震の時、或村で多くの家が殆ど倒壞したのに、たゞ一戸だけ倒れない家があつたので、主人に會つて色々事情を聞いて見ると、その家は過去數百年の間、度々起つた地震のために常に最も大きな害を被つて居た。他の家は倒れないでもその家だけは幾度か倒壞した。そこで色々工夫して倒れぬ家を建てたのだといふ。成る程見れば至る處に筋違木を入れて立派な耐震建築になつて居た。それ故にそこが地震構造線の上に位して、最もひどい震動を受けながらも被害を免れたといふ、これは學術上有名な話になつてゐる。こう云ふ研究は變態の樣であつて實は常態の研究なのである。

第三には常に科學的態度を持するといふことが望ましい。地理學が科學であるにも親しい事柄であり、日常目擊して慣れ切つてゐるために、兎角輕卒に取扱ひ

以上、郷土地理の研究が科學的であるべきは當然のことだが、併しそれがあまり

易いといふ傾がある。併し獨斷に陷つたり早計に走つたりすることは嚴にこれを戒め、極めて愼重に科學者の態度をもつて望まなくてはならぬ。

併し地理學は科學とは云ふものゝ、それは自然科學では無くて人文科學であるから、實驗によつて證明するとか、機械によつて測定するとかいふ樣なことは極めて困難である。地理學の基礎學たる地形學や氣候學は自然科學であるからよいが、人間生活の態樣は極めて捕捉し難き人類の意志の働きといふ部面に基礎を置くが故に、自然科學と同じ樣な方法で研究するわけには行かない。たゞ郷土地理の研究者は、極めて眞摯なる態度を以て、成るべく眞に近い統計を得て、これを出來るだけ正確なる地圖に表現し、地圖と統計とを根據としてその上に考察を廻らすべきである。一寸見た感じとか、ふと思ひ付いたこととかを出發點としたり中心としたりして、文學的な態度をとることは禁物である。どこまでも寫實派の畫家であるべく、印象派の畫家であつてはならぬ。

見る人の素養

郷土地理の研究者が一流の地理學者であることは、望ましいことではあるが不可能であること云ふ迄もない。況や小學校の兒童をして郷土を見せしめる場合、これに地理學の素養を要求することは無理の甚しいものである。

けれども井戸の中の蛙は大海を知らない。郷土にのみ生活して郷土以外を全く知らない人に、郷土を正しく見せしめることは不可能である。それ故に郷土地理の教育は尋常五年以後、少しでも郷土以外の各地の地理を學んだ後に課さなくてはならぬ。この意味に於て古い郷土地理、基本觀念養成を主とする郷土地理とは取扱の時期を異にせねばならぬ。云はゞ他地方の地理を學んだ上で、その得た知識をわが郷土に適用させて見るので、豫備的でなくて應用的の郷土地理だと云ふべきである。尤も應用的だからと云つて尋六の終まで待つ必要はない。地理の時

間には何處の地方を授けるにしても、常に郷土を顧みて行くといふ樣に、殆ど毎時郷土地理を附加して行くべきである。そして郷土地理の全體を纒め上げるのは、勿論最後に廻さねばならぬ。

これを教師としての立場から云ふと、勿論郷土以外を見たことの無い樣な人のあらう筈もなく、又一歩も郷土を出でない人があると假定しても、文獻によりその他によつて廣く地理的の素養を積んだ人もあるから、その點は何等の心配もないが、たゞ望むらくは古い型の地理學でなくして、新興の地理學、人類生態學としての地理學について一通りの研究があつてほしいのである。（拙著『人文地理學講義』は簡單ながら新しい地理學を遺漏なく取纒めたものである。ハンチントン原著、伏見氏譯の『人文地理學概論』も一通りは纒つてゐるが、ブリュンヌ原著、松尾氏譯の『人文地理學』や、佐々木彦一郎氏の『人文地理學概要』は新しくはあるが體系も整つてゐないし、且一部に偏してゐる憾がある）

ところで如何に立派な地理學者でも、その地を詳しく知らないものが通り一遍の觀察を下したのでは、時に非常な見當違ひをやることがある。南支を旅行して鐵道の枕木が悉く花崗岩で出來てゐるのを見て、石材が多くて木材の少い地方だからだらうと思つたら、豈計らんや、元は木であつたものを、地方人が拔き取つて薪にするので、已むなく石にしたといふ話であつた。又田舍の田圃道がコンクリートで出來てゐるのを見て感心してゐたら、それは道の兩側の田の持主が互に自分の田を廣げるために道を削りとるので、削られない樣にコンクリートにしたのだといふ。土地の人から事情を聞かないと、飛んだ考へ違ひをするといふ例はいくらでもある。

併し一面から見ると郷土外の人は觀察が鋭敏であり、着眼が非凡であるといふ長所もある。郷土人は日常目にしてゐるために却つて不用意に見逃し、日常茶飯事として何の奇も感じない樣なことでも、これを他郷人から見れば一大特色であ

つたり、極めて珍らしい事象であつたりすることがある。米國の大地理學者ハンチントン氏が嘗て日本に來遊した時、日本に牧畜業の發達しないのは草があまりに硬いからだと云つて、多くの日本の地理學者をアッと云はせたのは名高い話である。地理學者でなくても同樣で、獨逸の醫學者コッホ氏が日本に來た時、ペストの豫防に鼠を退治しようと思へば猫を飼ふに限ると云はれて、一同感心したといふ滑稽じみた話もあるし、琉球のハブ退治にマングースの輸入を考へついたのも、琉球の人では無くて外來者であつた。

この意味から云ふと教師の中には郷土外から來た人があるが、その人たちは郷土研究の一大適任者であると云はねばならぬ。そしてそれは郷土を最もよく知つてゐる郷土人が、郷土研究の適任者であると同じ程度であると云つてよい。郷土人と外來者とは、互に提携し協力して、短を補ひ長を助け、以て正しい見方に向つて突進せねばならぬ。

たゞこゝに注意すべきことは、郷土人は成るべく廣く外界を見るべきであり、外來者は又その地に住み込んで、少くとも一年以上その地の人となるべきだといふことである。學者が單なる地域研究をなすに當つても、成るべく長くその地に滯在し、出來るならば旅館でなくて民家に宿泊し、その地の人と生活を共にして研究するといふことを怠らない。況や郷土地理研究に、遠方から望遠鏡で見る樣な研究態度では仕方の無いことである。郷土人に向つては須らく郷土を出よ、郷土を見捨てよ、一度郷土を喪失して而して後新に郷土を認識せよとすゝめねばならないし、外來人に向つては郷土の人となれ、郷土に溶け込め、郷土に同化して而して後自己の周圍を見なほせよとすゝめたい。

家の地理研究

家の地理學

家は鄉土の單位であり細胞である。鄉土の研究は先づ家から始まらねばならぬ。先づ自己の家を研究し、それを中心とする周圍の生活を考へねばならぬ。自分の家とその周圍の土地及び人が一群となつて、或は神社を建て寺院を設け、土地を耕し水利を圖り、以て鄉土なるものを形成してゐるのである。教師は自己の家を研究して模範を示し、兒童をして各自の家の地理を研究せしめ、そこから出發して鄉土意識を明かにしなければならぬ。

近頃イギリスで家の地理(Home Geography)といふものを兒童に課してゐるが、日本ではまだこの種の研究が盛になつてゐない。都會地に住む人が借家を捜すに

しても、家の廣さと家賃の高下と、東京あたりではたゞ無暗に方角を云々する位のもので、ちつとも科學的な考察を廻らす人の無いのは遺憾なことである。

それに就て面白い例がある。小田内氏によると今から三十七八年前のこと、バウル・キユンメルといふ二十歳前後の一ドイツ人が横濱の商館に勤めて居た。ところが彼は自分の居を定めるために、日曜毎に横濱から東京の郊外を二ヶ年半に亘つて踏査した。そして氣候が暖かで地味が肥えて、人氣のよい交通の便利な地點をさがして、遂に碑衾村千束池附近を物色してこゝに居を構へた。日本語に不充分な彼は問答には不便であつたが、小學校の兒童に道を聞いた時の返事の良否で人氣を確めたり、寺の境内の整理や道路の良否や、火事の警鐘の整否によつて富の程度を目測したりした。そして非常に詳しい地圖を作製して居たので、一時官憲から怪まれた位であるといふ。彼は言語風俗を異にする異鄉に、極めて一時的の居を構へるにさゝこの科學的な態度でかくまで精密に調査してゐる。(小田内

通敏氏、「鄉土地理研究」參照）たとひ一時でも『住めば故鄉』である。借家さがしにも今少しの周到な用意はあつてほしいが、それは充分な鄉土地理の教養を受けた人にでなくては望めないであらう。

家の地理學として研究すべきことは、どんな場所にどんな方向に建つてゐるか、どんな構造と配置とを有するか、周圍の狀況はどうであるか、そしてそれ等は他に比して優れてゐるか劣つてゐるか、何處をどう修正すればよいかといふ樣なことから、更に進んでは家族の人數、職業、勞働及び生產消費の狀況、生活程度及び樣式といふ樣なことにも及ぶべきである。

家の立地研究

家はどんな地形の處に立つてゐるか。山の麓か臺地の緣か、川のほとりか海岸か。山の麓ならば後ろに切り取つた斷崖がありはせぬか、臺地の緣邊ならば斷崖

に臨んでは居ないか。隣家の屋敷との高低差は如何。たとひそれが廣い平野の中にあるとしても、幾分土地の高い部分になつてゐはしないか。都會地は別として、田舍の家であると祖先がこれを建てる時に種々の事情を考慮したものに相違ない。交通路の關係もあらうし飲料水の關係もあらう。日あたり風通し眺望など、色々な條件があるだらうから、それを古老に尋ねたり、或は周圍の狀況から判斷しなければならぬ。

家の周圍はどうなつてゐるか。田であるか畑であるか、それとも山林にとりまかれてゐるか、他の家とすぐに屋敷を接してゐるか、空地があるか、建物が密接してゐるか。

交通線との關係はどうか。主要幹線に沿ふてゐるか支線に沿ふてゐるか、それとも自家專用の道路によつて達し得られるのか。家の入口まで自動車が來るか荷車が通ふか、他家の屋敷を通らねばならぬか。水路は手近にあるか、家の軒端に

舟がつなげるか。都會地ならば街路に沿ふて居るか否か、沿ふてゐるならばその街路は鋪裝してあるか土石道か。人道車道の區別があるか。街路樹があるか。あればその街路樹はどんな種類の木で、何時頃花が[illegible]何時頃葉が落ちるか。

これ等は主として家の立地的研究である。これは見取圖を作つて見ると、一見して明瞭になる。ひとり平面的の見取圖のみでなく、あらゆる部分のあらゆる方向への斷面圖を作ると、地形的の關係も亦明かになる。そして平面圖には雨の時に水の流れて行く方向と經路を明かにするとか、斷面圖には出來るだけその各部の土質をも明瞭にするとよい。

ある家（福岡縣浮羽郡江南村の或家）

この家は部落の東端に位置し、一方は川に臨んでゐて、屋敷の一部は段丘的に一部分低くなつてゐる。西隣の家は殆ど軒を接し、礎石は全く同じ高さにあるが、家の前面の空地は敷地と

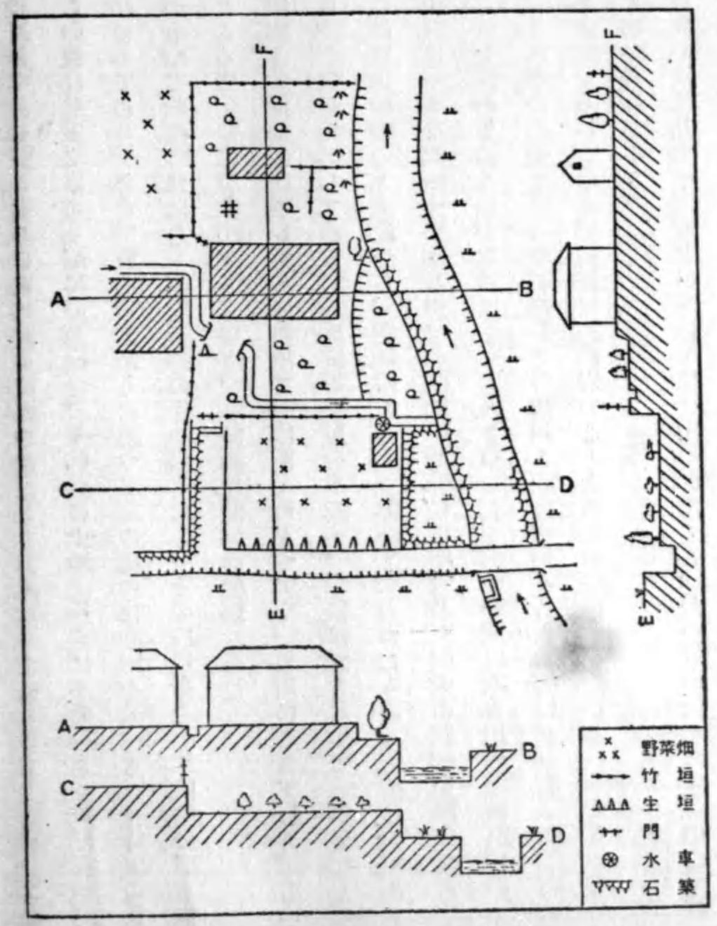
同じ高さであるから、この家の前の庭園や畑よりも一段高くなつてゐる。

この家は農家ではあるが村の舊家で、大部分の土地は他人に小作をさせ、ほんの一部分だけ自作をしてゐる。そこで普通の農家とは違つて家の前には庭園をしつらへ、竹垣の外側に野菜畑があつて收穫時にはこゝが脱穀等の作業場となる。その側にある小屋は半分が水車で米を春くところで半分は收納小屋ともなり、一時的な肥料の置場ともなる。

隣家との間から小さい溝が流れ出て、庭園をめぐつてやがて川に落ちて行く。この水が裏口から洗ひ場を提供してゐるし、庭園の風致をも添へ、最後は瀧となつて水車を廻してゐる。無論これは川のずつと上流から、灌漑用水として導いて來られたものゝ末流なのである。

土質は一樣な沈積土であるが、一段低い部分には拳大乃至頭大の圓礫を澤山含んでゐる。無論こゝを流れてゐる川が以前はずつと大きかつたもので、或は筑後川の舊河道なのかも知れない。これ等の圓礫は礎石や石崖やその他到る處に應用せられ、俗にダゴ石（團子石の意）と稱して珍重せられてゐる。石質は花崗岩のこともあるが安山[illegible]類が多い。大きいものは漬物石にも用ひられてゐる。

屋敷の水は凡て南と東とに流れて川に向つて落ちる。井戸場の捨水は溝の中に流れ込む樣に



第一圖　ある家の見取圖

なつてゐる。母屋の敷地の前面がすぐに少しばかり低くなつてゐるのであるが、この部の土は驟雨の度毎に流されて行つて、凡そ一年毎に三糎位の平均に減つて低下する。たゞ庭園の中は木の根と苔とで侵蝕を免れてゐる。

母屋の後方には土藏があり、その後方は雜木林と竹藪とになつて直ちに川に臨んでゐる。川岸はこの部に於て自然の土砂のまゝであり、曲りの關係から云つても最も侵蝕の甚しい部分にあたつてゐるが、竹藪があるので侵蝕に抵抗してゐる。隨つて川水はこの部で幾分洞窟狀に竹の根の下に喰ひ込んでゐる。

庭園の木は杉・檜等が二三本ある外は櫻・杏・梅・桃・つゝじ・百日紅等花の美しいものが多いので、農村としては一異彩を放つてゐる。母屋の東方川岸に沿ふて巨大な樫の木があつて、これは遠方からの目標となる。一般に東の方に大きな木が多いので朝の光線を遮るが、東方は土地が一體に低く、且一二粁の間聚落の無い廣い水田場であるから、この方面からの強い風を防ぐために植えられたものであらう。又これは一面洪水の際にも防禦物となる筈と思はれる。

夏は周圍の木が空氣を冷すので非常に涼しく、冬は北側に土藏があつて寒風を防ぐ樣になつてゐる。土藏の前に蓆を敷いて、小春日和の午後を子供がまゝごとの場所としてゐるのも、こ

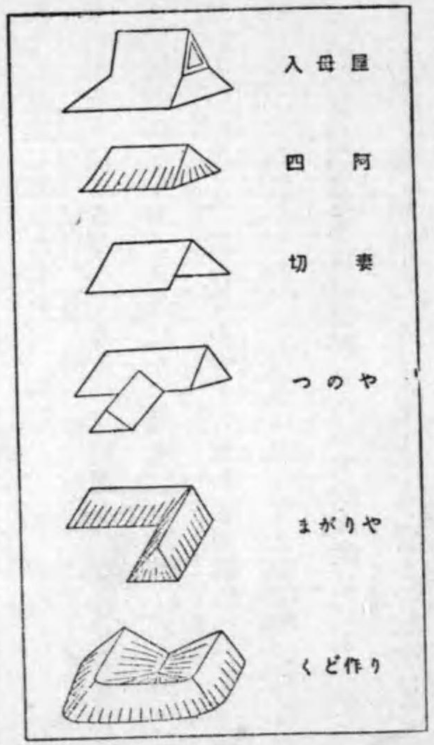
こが屋敷中で最も暖かい所だからである。

井戸は炊事場に近く位し、風呂場と相對してゐるので最も理想的である。水面は地上から約三米であつて、川の水面よりは少し高いから川水と直接の關係はない。水質は良好で冬は暖く夏は冷いが、大雨後には急に增加して幾分白色に濁るのが缺點である。併し湧水量は極めて豐富で、如何なる旱魃時にも渴水したことなく、井戸浚へにも全く水を汲み盡すことは不可能と云はれる位である。

家の構造

家はどんな材料で造られてゐるか。木造か鐵筋コンクリートか煉瓦造か。壁は土壁か板壁か、土壁ならばどんな色の土が用ひられてゐるか。鼠壁か白壁か又は荒壁のまゝか、或は燒杉板など打ちつけてあるか。屋根は草葺か板葺か瓦葺か、草屋根ならばどんな種類の草が用ひられてゐるか。それ等の材料は凡て何處から取り寄せられたものか。

屋根の形は入母屋か切妻か又は四阿か、或はつのや、まがりや、くど作りなど特殊の形をもつてゐるか。屋根の棟はどんな形になつてゐるか、藁屋根に瓦の棟となつてゐるか、千木・樫木などの形が存してゐるか。或は煙出しの小屋根がついて居はしないか。雪の多い土地には雪どめの棒があつたり、積雪の時に出入する口がついてゐたり、養蠶の盛な地方には煙管の雁首に似た大きな空氣抜きがついてゐたり、風の強い地方には瓦に堅固な漆喰が施してあつたり、地方で色々特殊の形のあるものであり、又

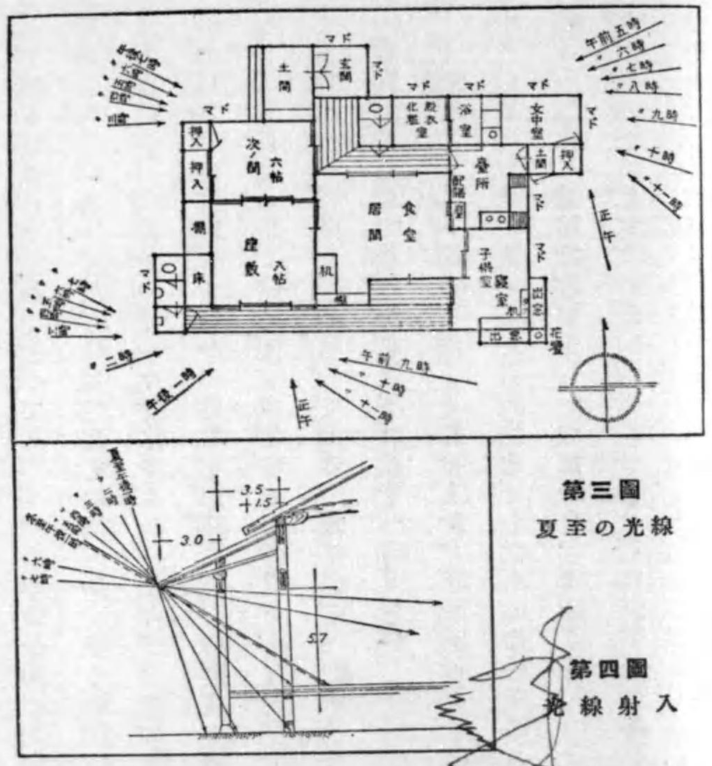


第二圖　屋根の形

同一聚落内にも一樣の形のみは無いから、これ等は充分に觀察記錄しなければならぬ。屋根の傾斜の度合なども雨量その他と大きな關係のあるものだから、決して輕々に見逃してはならぬ。

家の間取りはどうなつてゐるか。居間・客間・寢室・臺所・便所・浴室などの位置、廣さ、構造はどうか。日あたり、風通しの模樣はどうか。都會の家は日當りのよくないものが多く、田舍にあつても炊事場が暗かつたり、寢室が風の通さぬ樣な構造になつてゐたりする。これ等は或程度までは修正し改造し得るものであるから、その便不便、良不良を批判せしめて改良意見を立てさせるといふ樣なことは、兒童への興味深い課題となるであらう。日當りの狀態などは、室內及び庭園などに就て、四季に亘り朝晝夕の各時間にそれ〴〵測定して圖示するを要する。

家の向きとか、井戸や便所の位置などに就ては、昔から家相といふことがあつてやかましく云つたものである。地方によつて習慣は色々であるが、關東あたり



第三圖
夏至の光線

第四圖
光線射入

これは廣島市附近に於ける太陽光線の方向で、上は夏至(六月廿一日)に於ける每時刻の光線の方向、下は夏至及び冬至(十二月廿一日)の午後、南方の軒から光線の射入する狀態を示したものである。住宅として理想的な建て方が示されてゐる。

では借家を選ぶにも磁石を携へて行つて、今年は金神が丑寅の方向にあるから、入口がこちらに向いて居ては鬼門だとか何とか、全くの迷信を仰々しく振り廻す紳士も多いが、年によつて一々變化するものならば、年々轉宅したり建てかへたりせねばならぬ道理で、誰かの考案した樣に廻り舞臺式の回轉家屋でなくてはならないことになるが、併し元來家相なるものはそんな迷信ではなくて、その地に即した實際的科學的なものなのである。地勢がどうで水はきの方向がどうで、主風の方向がどちらであるから便所は風下へ廻すとか、井戸は水流の上手に掘るとか、入口をこちらへ向けてはよくないとか、所謂家相見と稱する專門家が、今日で云へば家の立地研究の上から判斷を下したものなのである。勿論その起原が頗る古く、民衆も蒙昧で理解がなかつたから、陰陽五行だの十干十二支などを組合せて、始めから已に幾分迷信的であつた。それが幾千百年を經、支那から日本に傳はるに及んで、更に迷信の輪をかけて殆ど荒唐無稽のものとなつてしまつた。

母屋の間取りも附屬建物の配置も、その地方で特色のあるものである。これ等は鄕土人にとつては當然のことゝして注意を惹かないことが多いが、他鄕の人から見ると非常に珍らしいことがあつて、そこに何等かその地に即した特殊の原因の潜んでゐるのを發見することがある。

家の周圍の垣根にしてもそうである。板垣・土塀・竹垣などから、種々の植物を利用した生垣、その生垣の中でも島根縣あたりのついぢは極めて珍らしいものであり、琉球の石垣や朝鮮の高粱垣にも夫々の特色がある。處によつては冬のみ設けて夏は撤廢するのがあるが、それは全く寒風を防ぐためであつて、低い土塀をめぐつて堀をつくつてゐるなどは、外敵防禦を第一義としたものであることは明瞭である、家宅の周圍に防風林を作ることは平原地に一般的であり、丘陵地や谷地では裸出せるものが多い。

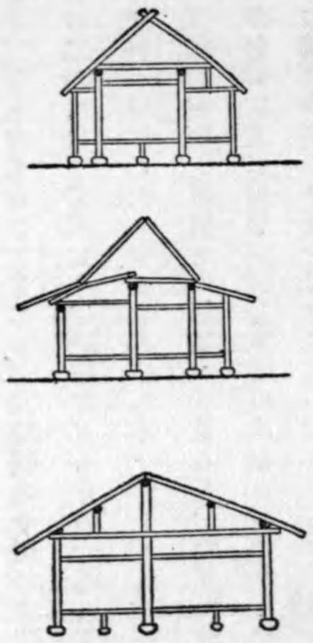
都會の家には軒が直ちに街路に接するものと、門構へになつてゐるものとの二

様の區別があり、前者には更に格子戸、硝子戸、雨戸など色々ある。それはその家の職業によつても違ひ、又建てた年代によつても相違がある。門構へにあつてはその門の構造が又千差萬別で、あるものは最も新式の西洋風がとり入れられてあり、或ものは極めて古い大名屋敷の名殘りがそのまゝ傳はつて居たりする。

雨戸の上部に硝子をはめることは深雪地の特色である。又同じく深雪地の都會ではがんぎと稱する軒下通路があつて、臺灣の亭仔脚と目的は違つても形は共通である。椽のある家と無い家、繰り戸の家と妻戸又は跳上り戸の家などと數へ立てれば中々種類は多い。

家屋の骨組といふことになると、兒童の研究問題としては聊か無理かも知れぬが、鄉土研究家としては一通り調べて置かねばならぬ。桁がどうなつて梁がどうなつてゐるか、屋根の小屋組はどうなつてゐるか。庇があるか、庇の柱は小梁で繋がれてゐるか或は獨立してゐるか。關西と關東とでその組み方に大差があり、

風の強い地方、雪の多い地方には、夫々風壓及び積雪の壓力に堪へるための種々の工夫が積まれてゐる。又近頃大震災を蒙つた丹後峰山地方では、殆ど悉くの家が到る處に筋違を用ひた耐震構造の家屋となつた。



第五圖　各地民家の骨組
（今氏による）

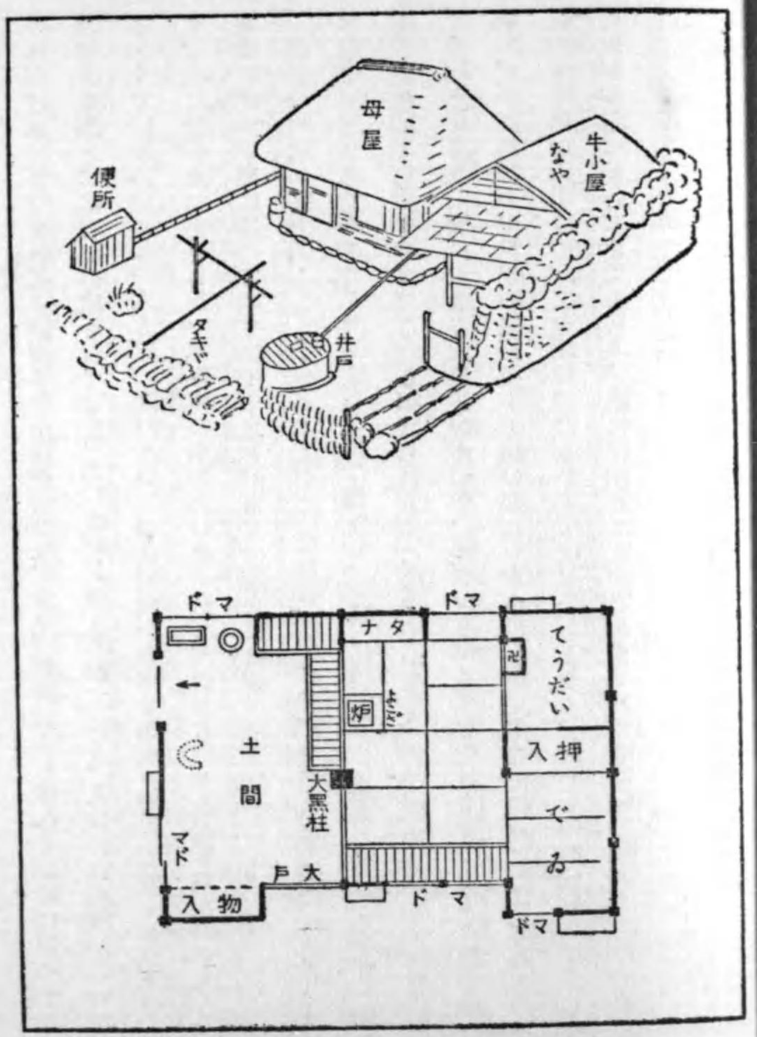
都會地では二階以上の高い家屋が非常に多い。併しその二階や三階にも色々の構造があつて、普通の商家にあつては二階は單に商品倉庫として用ひられるため、天井も低く窓も小さく、表は土藏風の造りとなつて鐵格子などのものが多いが、旅館や料理店などでは二階も三階も明るい客室となつて居る。併し近時はデパート式に二階三階に商品を陳列したものもある。又裏

町あたりでは階下が店で階上が居間になつて居たり、階下が居間で階上を小工場として居るものなどもあつて、それ〳〵特別な構造を有することが多い。

田舍は多くの場合平家が多いが、時として物置にのみ使用される樣な低くて暗い半二階を有することもあり、又傾斜地や川の堤防などでは家の前面は平家でも裏は二階になつて居たり、納屋などもその一端に支柱を設けて階下を物置にしたり肥料小屋にしたりすることがある。

又家の正面と屋根との關係から見ると、出雲大社の樣に妻を正面とする妻入りと伊勢神宮式に平を正面とする平入との別があり、勝手場の位置から見ても向つて右側に勝手場を有する右勝手とこれに反する左勝手とがある。便所や浴場も暖國では母屋と離れた別棟のものが多く、寒國では多くは母屋の中に取入れてゐる。

ある家の構造（伊豆大島の住家）



第六圖　伊豆大島の家の構造（今氏よにる）

母屋は南向きでその横に納屋（牛小屋を含む）があり、便所は少し離れて別棟になつてゐる。北側と東側とには石垣が積まれて、その上には花が植えられてゐる。入口には石段があつて、入るとすぐに井戸がある。尤もこの井戸といふのは屋根から來る雨水を溜めて置くタンクであつて、主に使ひ水に供せられ、飲み水は別の處にある共同井戸から朝夕汲んで來るのである。母屋の前は廣い庭になつて居て物干竿などがあり、庭先には薪が積まれてゐる。

母屋の間取りは土間・アラト・デヰ・帳臺と呼ばれる部屋々々から成り、土間には流し、クド、木臼等が置かれてゐる。アラトは茶の間に相當し、一隅に爐があつてその一側をヨコザと稱し、主人の坐席と定めてある。これと相對した方面には佛間がある。

土間とアラトの間に大きな大黒柱があつて、前後から來る梁を受けさせてある。梁の形は特殊で、丁度西洋の中世紀の建築の小屋組の樣に、左右から出て中央で挿みになつてゐる。それは恐らく島の大工は船大工を兼ねてゐるからではないかと思ふ。併しその形成をうながしたのは風が非常に強いためであらう。風には極めて丈夫である。デヰは寢室で帳臺は納戸に相當してゐる。（今和次郎氏「日本の民家」による）

家の環境

家の周圍にどの樣な植物があり、どの樣な動物が棲んでゐるか。松の林があるか竹の藪があるか。一月には裏庭に水仙の花が咲き、二月には軒端の梅、三月には庭の彼岸櫻、五月には前の小溝にあやめが咲き、七月には垣根に芍藥が綻び、朝顏・萩・菊・紅葉はもとより、庭先や道のほとりに生ひ立つ雜草に至るまで、發芽、開花、結實の季節をそれ〳〵記錄すべきである。又家を訪づれる昆蟲の類、蝶は何時頃から見え初めるか、蟬は何時から鳴き始めるか、蚊は、蠅は、鈴蟲は、コホロギは、夏の電燈に飛び來る蟲、垣根や木の枝に巣をつくる蜘蛛、それ等の凡ては人の生活に何等かの影響を及ぼすものである。田舍は勿論のこと、都會の家にあつても量こそ少けれ中々多くの動植物に見舞はれるものであるから、注意深く且根氣よく觀察記錄しなければならぬ。

夏は何れの方向から涼しい風が吹き、冬は何れから寒い風が吹いて來るか。隨つて夏はどの室が最も涼しく、冬はどの室が最も暖かいか。冬の寒風を防ぐために何か特別の施設をするか、春と秋とはどの方向の風が多いか。

雪の積り方はどんな樣子か、何處に吹き溜りが出來るか、何處が最も早く解け、何處が最も遲くまで殘るか。霧は何時頃最も多く出來るか、霧の時の展望距離はいくらか、五十米、百米、二百米の距離にある目標を定めて置いて、それの見えない場合が何回あるかを記錄せよ。

何處にどんな山があり、何處をどんな川が流れてゐるか。座敷から眺め得る風景をスケッチせよ。田舍の家ならば庭から、都會ならば物干臺などに昇つて、四周の風景、山川草木から建築物その他に至るまで、凡ての現象を書取るべきである。

郷土の立地研究

地形と位置

郷土が地形上から見てどんな位置にあるかを見よ。農村ならば廣い平野の眞中にあることもあらうし、平野の片隅の臺地や山麓に接した部分にあることもあらう。平野の眞中と云つても川のほとりであるか、川から何程か離れてゐるか。川のほとりならばその右岸か左岸か、川の曲つた凸側か凹側か、それとも支流の合一する部分か分流の出て行く部分か。橋があるか無いか、河口からは何程を隔てゐるか。川から離れてゐるとすればそこは舊い河道の跡に關係は無いか。平野の中でも幾分土地の高くなつた處ではないか、小さい淺い谷の頭にあたるところでは無いか。

山麓ならば山の斜面に上つてゐるか、それとも全然平地の部分であるか。平地と山の斜面との境界が不明瞭でその兩者に跨つてゐるか。山の方面は山麓の崖になつてゐるか、それとも谷の口にあたつてゐるか。扇狀地の上では無いか。

谷の村落ならばそれは谷のどの樣な部分にあるか、谷壁か谷底かその兩者に跨つてゐるか、谷には川があるであらうが、その川との關係はどうか、兩岸に跨つてゐるか一方のみか。若し谷壁の斜面ならばその斜面の方向は西か東か。谷全體から見てその口にあたつてゐるか谷頭の部分か、二つの谷の合する處か。

高原の上か臺地の緣邊か、山の中腹か山背の平地か。開析された準平原にあつては山頂に近い部分に少しばかりの平地があつて、そこに農村の開けてゐることも少くない。又海岸の丘陵にあつてはその丘陵の麓であつたり中腹であつたりする。海岸と云つても直ちに海に臨んだ聚落もあれば若干の距離を保つてゐるものもある。その距離を保つてゐる理由が人工埋立地のためであつたり、自然に出來

た三角洲のためであつたり、或は不毛の砂丘であることもある。海岸の形から云つても灣奥であつたり岬端であつたり、海峽に臨んでゐたり島蔭であつたり、その位置は實に色々である。

都會は多くの場合平地に存在し又水邊に沿ふものであるが、その位置は尙仔細に點檢しなければならぬ。平地のどんな部分か、海岸のどんな部分か、川との關係はどうなつてゐるか。わが國には中世以後の城下町が多いが、そのために町の位置が河岸にあるものが頗る多く、又丘陵の一端にあつたり或は孤立した小丘を取りまいてゐるものなども少くない。

市町村を一つの單位として見る時は、部分によつてその地形的位置が種々である場合が多い。住宅區が臺地の上に、商業區が低地に、工業區が海岸にあるといふ樣に、村落でも或部落は山麓に、或部落は河岸に、又或部落は平地に散在するといふ樣な場合がある。ずつと細かく見る時は、單純な谷の一部落でも、或二三

戸の家は谷壁に、或他の二三戸は河岸に、そして又他の二三戸は道路に沿ふて小商賣を兼業としてゐるといふ樣なことがあるから、一聚落を總括的に見ると共に、又部分的にも觀察することが必要である。

水の制約

人間が住居を定めるにあたつて、第一に心にかけるものは飲料水の有無である。適當な飲料水の無い處には一日たりとも生活は出來ないのであるから、何は犧牲にしてもこれだけは確實に握らねばならぬ。近代に於ては種々の巧妙な手段によつて隨分遠方から水を得ることも出來るが、それは非常に豐富な資源でもあつて、どうしてもそこに聚落を作らねばならぬ場合等に、已むなく行はれる手段に過ぎない。例へば長崎沖の端島炭坑に於て、海水を蒸餾して飲料水を製造してゐる如きがその例である。

故に聚落の位置を見る時には常に飲料水との關係に注意しなければならぬ。山麓の村にはよい水の出る井戸のあるのが普通であり、河岸の聚落ではその河水を飲用してゐることも少くない。海岸などで井戸を掘つてもよい水の出ない樣な場所では、一村僅かに數個の井戸があつて共同にその水を使用するのが常である。而して都會地では人口集積のため飲料水が缺乏するから、多くは河水・井水等を水源とする上水道を設けてゐる。

飲料水の外に水の重要であることは農村に於て著しい。それは日本の農業が米作を主體として居るために、雨量の極めて多い國であるにも拘らず人工灌漑が殆ど絶對的に必要なからである。即ち灌漑用水源の所在地に水田が出來、水田のある處に住居が營まれる。全然水田を持たない農村は極めて稀である。扇狀地の頂點や末端に村落の多いのも多くは灌漑用水の關係である。

水は極めて必要であるが、あまりに多いと却つて居住を妨げる。地下水が高く

て濕地沼澤となつてゐる場合には、そこに居を定めることは健康上頗る不利である。廣い平野の聚落が僅かながらも土地の高い處を選ぶのは一はそのためである。海岸の新開地などでも家は多く堤防の上に存在する。又不時に起る洪水の有害なことも勿論で、大河の沿岸に於ける聚落が多く河岸から若干の距離を有する如き、或は舊河道の底に聚落の出來ないなど何れも洪水を恐れるからである。

地面の利用

商工業を主とする聚落以外にあつては、必ず地面又は水面を直接その生活のために利用してゐる。而してその利用の仕方には種々の樣式があつて、或は植物を栽培したり動物を飼育したり、或は自然のまゝに放置してそこに生ずる動植物を採集利用したりする。又等しく植物を栽培するにしても、極めて粗放な仕方もあれば集約的な方法もある。それ等はその地の氣候や地勢や種々の環境によつて相

違するのであるが、この利用方法と聚落の位置との間にも亦見逃すことの出來ぬ關係のあるものである。

例へば水田と畑とが相並んで存在するときには、聚落は多くその水田と畑との境界線附近に營まれ、畑と山林と並存する場合にも、兩者の中間に村落の位置することが多い。それ故に一般的には地面利用の樣式の境界線に聚落の出來る傾向があると云つても差支ないのである。

而してその聚落の生活を支持する地面が何處まで擴がつてゐるかといふことは、又種々の環境の制約を受けるのであつて、概して云へば粗放的に利用する方面へは廣く、集約的に利用する方面へは狹く擴がるものである。即ち一方が森林で一方が水田である場合には、水田の方面が二粁の地點まで支持面となつてゐるとすれば、山林の方面は五粁十粁までが支持面となつて居るといふ風である。漁村の如きは背後に向つては僅かな畑を有するに過ぎないが、前面には廣大なる水

面を占有してゐるのが常である。

この意味からすれば商業都市にあつてはその商圏は即ち生活支持面であると云つてもよい。そこでその生活支持面がどんな形をしてゐて、その中のどの部分にその聚落が存在するかといふことを明かにしなければならぬ。

交通線

郷土は交通線に對してどんな位置にあるか。幹線に沿ふてゐるか支線に沿ふてゐるか。村を重要な鐵道が通過してゐるにしても、そこに驛がないならばその線に沿ふてゐるとは云ひ難い。いくら海岸に臨んで居ても、船が着かなければ海岸で無いのと同じ意味になる。

そこにはどの樣な交通線が集り、如何なる交通機關が利用せられつゝあるか。水路と陸路との結節點にあるか、高級交通機關と低級交通機關、例へば汽車と荷

馬車との連絡點になつてゐるか。水路に沿ふてゐるならばどの程度の船を近づけ得るか。

聚落が道路に沿ふてゐるとすれば、個々の家はその道路に面してゐるか、それとも道路には關係なく別の方向に立つてゐるか。これは聚落の位置が道路と何程の關係をもつてゐるかを知るために必要なことである。例へば宿場町の樣に道路交通がその聚落の生活を維持するに最も有力なものであるならば、個々の家は何れも道路に面して居るのが普通である。併し普通の農村にあつては、どんな大きい道路が村を貫通してゐても、家はそれには無關係に立つてゐる。

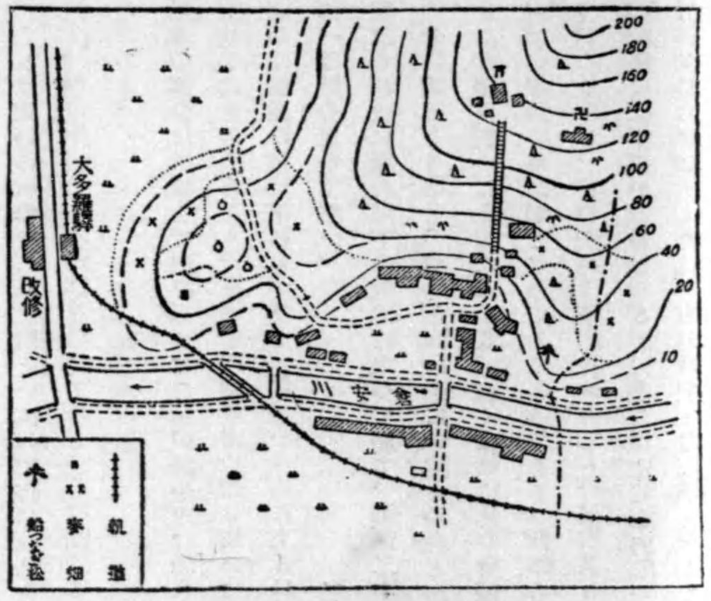
併し道路が直接に生活を支持してゐない場合でも、その交叉點や分岐點、橋の袂、峠の麓などに聚落の出來てゐる場合は多い。昔は道路に沿ふて休み茶屋が澤山あつたが、交通機關の發達した今日では、それ等の家も多くは農業に轉向して、たゞ聚落の位置と形態に昔の名殘りを止めたものがある。

ある村の立地研究（岡山縣上道郡可知村字大多羅）

北には海拔二三五米の芥子山が饅頭を置いた樣に据つてゐる。それが南方の廣い新開地に臨んでゐるので、遠方からもよく見えて戲れに備前富士などとも呼ばれる。勿論富士に似たといふほどの形ではないが、併しその頂上の眺望は割合に廣い。

この山の周圍には多くの谷が刻み込まれ、その谷の出口にはそれ〴〵村落が出來てゐるが、南側のみは割合に谷が淺いにも拘らず、村落は最も發達してゐて殆ど一續きになつてゐる。その中の西端に位するものがこの大多羅である。隨つて村の最も古い部分は、淺いけれども谷の出口にあたつて居り、山の突端にある二三の家の如きは割合に新しく出來たものである。

そこには一條の河が西に向つて流れてゐる。それは幅も廣く水量も豐かであるが、勿論自然の河ではなくて人工の灌漑水路である。附近の水田はこの川から得る水によつて潤はされない限りは存在し得られぬ。低夷な芥子山から流れて來る水の如きはもとより問題にならぬのである。そしてこの河水は灌漑の外に家庭用水ともなれば、一部の人は飲料にも供してゐる。井戸は谷の部分に數個ある外は、到底飲料となる樣な水が出ないからである。



第七圖　大多羅部落略圖

河水が飲料に供せられることの外に、河に小舟を通はすことも出來、兩岸に道路があつて便利な交通路となつてゐる等のために、そこにも連擔家屋が數十戸出來てゐる。併しそれ等は概ね農家であるから、河の南岸にあるものゝ如きは多くは道路に背を向けて立つて居る。道路に面して小商賣をしてゐるものはほんの一二戸に過ぎない。

すつと西の方に南北に通ずる大道路が出來てからは、商業の中心はその方に移つたのであ

る。こゝは道路の改修せられた所といふので俗に改修と呼ばれ、軌道の驛もあつて二三の商店が並び、物資配給の一小中心となつてゐる。この軌道は東は西大寺町、西は岡山市に通じてゐるのである。

低地の部分は中世まで海であつたことが慥かで、恐らく地盤の隆起と人工の干拓とが相伴つて生成したものであらう。東部の突端の處に船を繫いだといふ傳說のある老松がある。山の裾は著しく海崖の地形を存して居て、低地から山に上るには急阪又は石段を必要とし、山裾とも云ふべき部分は全く無い。

家はそれ故に概ね崖下の低地に立つて居て、海拔二十米以上の地にあるものは、谷の扇狀地の部分に數個あるのと、ずつと高い處に寺院と神社とがあるのみである。

山の傾斜は割合に急であるから、多くは松の林や竹藪となつてゐて、たゞ傾斜の稍緩かな山の突端の表面のみが畑となつてゐるのみである。西部にあつては稍なだらかな分離丘陵の形となつてゐるので、その表面は全部耕地となり、果樹園もあつて梨や葡萄がつくられてゐる。その鞍部には小徑が通じてゐるが、そこには元郡內唯一の高等小學校があつた。

村の人たちの耕す土地は聚落の附近にはあまり多くないが、河の南に廣い新開地が開けてゐ

るので、その生活支持面は相當に廣い。併し大體から云つて家と耕地との最大距離は一粁內外である。

聚落の形態

村の姿

汽車の窓から、或は飛行機の上から、ふと眺めた村の姿、それはその村に住む人には却て見出し難いものであらう。自分の顔は自分に見えない樣に、村の姿はその村を離れて見ねばわかり難い。併しそれかと云つて遠方から一瞥しただけで、村の姿がすつかりわかるといふのでは無い。ほんとの姿は詳しく檢討しなければならぬが、先づ一般的な概念を得るためには、最初に大觀することが必要である。聚落研究家が知らない村や町に入つた時、第一に附近の小山に昇るか、又は高層建築の頂上に上つて大觀するのを常とするのは、全くそうした意味の必要があるからである。

それは地圖を見れば或程度までは滿足が出來る。併し地圖には或限られた事象のみしか記されて居ない。極めて僅少な土地の高低や、立木の模樣、建築物の樣子などは多くは地圖に出て居ないから、どうしても實地を見る必要がある。先づ山に登れ、或は火の見櫓に上れ、そして四方を眺めて見よ。村の周圍は打ち開けた耕地であるか、それとも森林であるか。森林ではなくても防風林の樣なものがあるか。或は川にとりまかれてゐるか、濠をめぐらしてゐるか。

苔の生えた藁屋根の村は如何にも打ち沈んだ落付を見せるが、黑い瓦に白い漆喰のある鹿兒島あたりの屋根は極めて明るい感じを與へる。北國の板屋根・板壁、出雲あたりの赤土の壁、關東の震災地に多く見るトタン屋根など、どれも特色ある村の色をあらはしてゐる。

家と家とが接してゐるか離れてゐるか、離れてゐるならばその間隙は野菜畑か麥畑か、それとも木を植えならべた庭園が多いか。かしこに三軒、こゝに五軒とい

ふ樣に、小さいグループをくつてゐるか。それとも一軒一軒が別々になつてゐるか。軒を並べてゐるものは連檐部落であり、集つてはゐるが空地を介在するものは疎集村落であり、離れ〳〵になつてゐれば散點村落と名づけられる。

町の形

少し大きな都會になると、いくら飛行機に乘つたとしても、一目に全市を大觀することは出來ぬ。どうしても部分々々の觀察から始めて、最後にこれを綜合せねばならぬ。故にビルヂングの見晴臺やお城の天守閣に上つて、それから更に地圖と見くらべながら電車にも乘り徒歩もしなければ、容易に町の姿を呑み込むことは出來ないのである。

仙臺は森の都と云はれるが、城址の公園から眺めると全く家の間に森があるのでなくて、森の間に町が隱見してゐる。熊本のなにがしといふカフエーの四階に上

つた時にも、やはり同じ樣に森の都だといふ感じを起した。併し比治山から眺めた廣島の町は全く黑い瓦の屋根ばかりで、綠の色は殆ど見出すことが出來ぬ。

北海道や樺太の町では、家は立派に四角形に並んでゐるが、その中央に空地が殘つてゐるので、街を歩いてはわからぬが高處から見ると齒の拔けた感じがする。古い城下町の士族屋敷などにもよく見る姿である。そんな處には木でも充分植えたらよからうと思はれぬこともない。總じて日本の都會には綠色地域といふものが不足してゐる。これは住民の健康上からも考慮を要する問題である。

町はづれを歩いて見よ、こゝまでは町でこゝから先は田舍であるといふ樣に、はつきりと境界がわかつてゐるか。それとも都會と田舍との漸移地帶が幅廣く存在して、全くボカシの樣になつてゐるか。都會と田舍の區別は單に家屋の連續してゐるか否かでは不充分であるが、都會で働く人たちの住宅が多いか、それとも田園に生活の支持物を有する人が多いかといふ樣なことは、瞥見しても大體の見

當はつくものである。併し正確には地圖に二三百米内外の方眼を引いて、その一つの目の中にある家の職業の割合を算出し、農とか漁とかいふ樣な田舍的職業の家が何%あるかを明かにし、これを田園指數と名づけ、地圖にこれを記入して等田園指數線を引くとよくわかる。こうして若し都會が際立つて田舍と區別されてゐるならば、その町を浮島式の町と云ひ、ボカシになつてゐる場合にはボカシ式の町と名づける。勿論一つの都會の一方の側は浮島式で他の一方はボカシ式だといふ樣な場合もある。

幹と枝

町でも村でもその全體の形は圓形のことがあり方形のことがある。又宿場町や川ぞひの村の樣に蜒々として長蛇の如く續くものもあれば、十字形・丁字形・三日月形など樣々の形を呈するものがある。又大きな幹から小さな枝の出てゐる場合

は多い。

幹が大きくて枝の小さいものもあれば、幹が小さくて枝の大きい場合もある。前者を肥り型、後者を痩せ型と名づける。和歌山市は肥り型で津市は痩せ型である。又圓形の幹から八方へ小さい枝が出ると齒車型となり、それが半分になれば日の出型となる。(拙著「人文地理學講義」下卷三九頁參照) 昆蟲の觸角の樣に一二の方向へのみ長い枝の出てゐるものもあれば、海底のひとでの樣に四方に向つて手を出すものもある。凡てこれ等の枝は地形のために制限せられるか、交通線に沿ふて伸びるか、何等かの理由のあるものであるから、それを明かにすれば將來の發展方向も明瞭になつて來る。

村落にあつても大部分は家が密集してゐるのに、一部に飛び離れた家があるとか、散點村落であつても特別に遠く離れた一軒家、二軒家、三軒家などがある。これ等は村落の枝と見るべきもので、やはりその存在には何等か自然又は人事の

制約がある。谷に沿ふて伸びる村には、谷頭を去つて峠の上に一軒茶屋が出來てゐたり、海岸の灣奥にある漁村にも見晴しのよい岩角の上に一軒の別莊が立つて居たりする。

一般的に云へば軀幹は古く肢節は新しい。枝はその聚落の延びて行く方向、發展する方面を指示するものと云つてよい場合が多い。そこでその枝の方向、殊に最もよく生長する枝の方向は西か東か、海岸の方か山の方か、川下か川上か、平地に向つてか丘陵に向つてか。都會にあつては概して東に向つて生長するものが多く、又港の無いものはこれを求めて海岸に延びようとする。村落にあつては新しい干拓や埋立が出來て平地へ進出するものが多く、谷底の危險を避けて谷壁に上つて行くといふ樣な場合もある。新しい道路が出來たり、鐵道の驛が出來るとその方向へ枝を出すが、道路が變更されたりすると一旦伸びかけた枝がそのまゝ枯れて萎む樣なこともある。

都會にあつては生長は住宅地の方面へ著しい。そこで住宅として好適した方面、即ち交通は幾分不便利でも土地が高燥で空氣が清澄で、風上にあたつてゐて風景のよいといふ方面に膨脹し易いものである。これに反して工業地區としての發展は、土地は卑濕でも用水が多く水運の便ある方面に向ふ。

農村にあつては土地の利用との關係が深い。廣い曠野が新に開墾せられると村はその方面に枝を出す。耕地が居宅からあまりに離れてゐると、往復の時間が惜しいから耕地の眞中に農場小屋を建てるが、それがやがて短期間の居住地となり、本家から分れた分家となり、本村から出て行つた出村となつて生長する。

垂直の形

村落にあつては土地に凸凹のある場合が多いので、緩かに一方に傾いた斜面型や、幾つかの段になつた階段型などがあり、或は一つの丘陵を中心に四方に向つ

て下つてゐるものもあらうし、一つの谷を中心に兩方へ這ひ上つてゐるものもあらう。幾つもの高低があつて波の樣になつてゐれば波浪型であり、砂丘の村などによく見るところである。

平地であつてもそれがほんとに水平的な少しの凸凹もない平板狀であることは少い。都會地と云へば大抵は平地にあるが、それでも一部は山なり臺地なりに侵入してゐることが多く、それでなくても幾分かの高みもあれば窪みもある。河などが貫流してゐるとその兩側の堤防は一段高くなつてゐるのが常であり、堤防は高くなくても橋の部分だけは高くなつてゐることもある。歩いて居ては氣のつかぬほどの高低でも、時々荷車の行き惱むのでその所在を知ることが出來るし、洪水などがあると殊に明瞭に土地の高低がわかるものである。都會地では洪水の時の侵水區域やその水深等の分布は、ぬからずに記錄して置かなくてはならぬ。

土地は平地でも建物に高低があるために、垂直形態に特色の出て來る場合があ

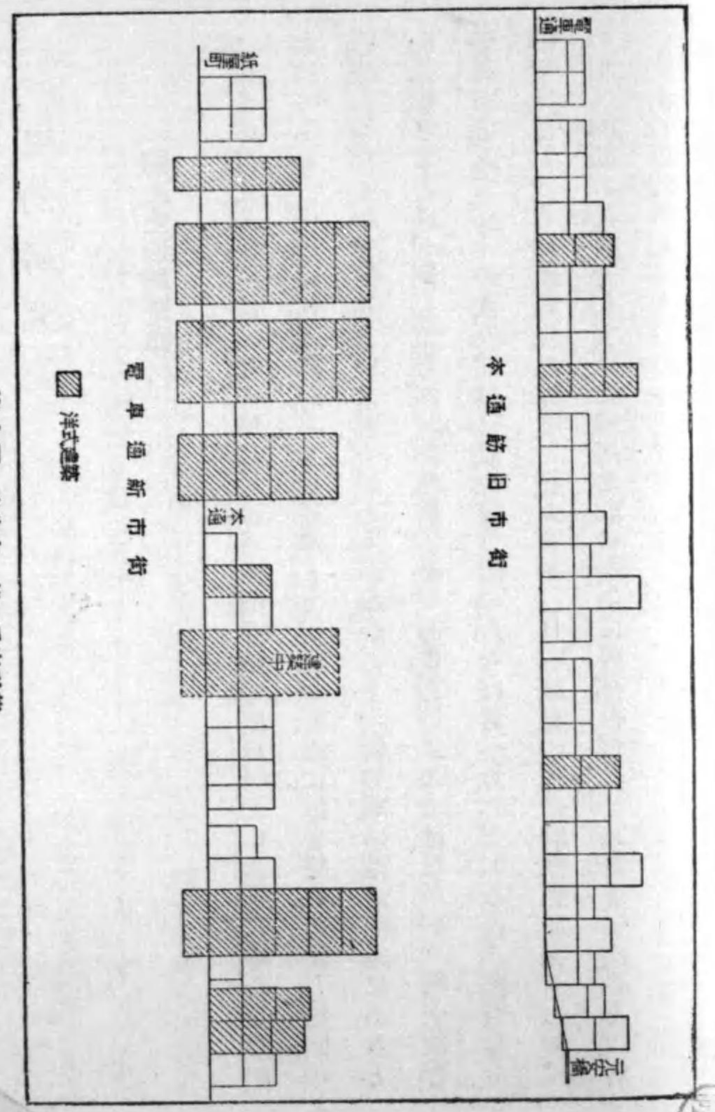
る。村落の中央に巨大なお寺の屋根があつて、その周圍に低い民家が群がつてゐるといふ樣なものもある。都會では殊にそれが著しく二階三階の家に交つて時々平家があつたり、或は五階六階の大建築物が交つてゐたりする。わが國ではまだアメリカなどの樣な摩天閣を見ることは出來ぬが、郊外の住宅區から都心の商業地域へ通勤するといふ形式は次第に濃厚になりつゝある。そのため大體から云つて中央が高くて周圍が低いか、或は海岸が高くて內陸面が低いといふ樣な場合が多い。

ある町の垂直形態（廣島市の中心部附近）

廣島市は人口二十七萬を有し六大都市に次ぐ大都市ではあるが、その形態から見ればまだ近代式大都市として建設の途上にあるものと云はねばならぬ。何となれば街路もまだ狹く、鋪裝も充分行き屆いて居ないし、又三階以上の高い建築物はまだ寥々たるものだからである。その中心部とも云ふべき本通筋の如きも、街幅が僅かに四間に過ぎないから、到底高い建築をする

ことも出來ない。そこには數十年前の建築物が依然として幅をきかせて居て、地方色の香りが頗る高い。即ち大抵の家は二階造りで、その二階といふのが極めて低くて窓も小さく、表は看板ですつかり隱れて居て、たゞ商品の貯藏室となつてゐるに過ぎず、決して人の起居に適しない程度のものである。やゝ新しい家、又は旅館などの樣に二階を居室として使用するものゝみは、普通の二階となつてゐるがその數は少い。洋式の建築も稀にあるが、木骨鐵網コンクリートが主で、ほんの型ばかりの洋式であり、高さも二階又は三階程度を超えない。

併しこの本通りと直交する南北線の電車通りは、明治の末年に堀を埋めて新に作つた大通りで、街幅も十間となつてゐて、そこには古い家として平家が二三殘つてゐる外は、比較的新しい二階造が多く、又堂々たる鐵筋コンクリートのビルディングが續々と建築され、地方的色彩を失つた近代式の都市形態を現出しつゝある。それは地下室共に六階位のものが多く、大抵は銀行や保險會社の類である。取り殘された中間の木造家屋も、やがては悉く洋式のものとなるかも知れない。これ等洋式の建築物は概ねこゝ四五年內に建てられたものである。この新舊兩市街の垂直形態をスケツチすれば左圖の如くなる。



第八圖　廣島市一部の垂直形態

史的研究

郷土史の着眼點

郷土の歴史的研究は『その地に於ける人間生活の歴史』といふ點に中心を置かねばならぬ。何の時代に誰がこゝを通過して、誰が何處に城を築いて誰と何回の戰があつたとか、何某といふ孝子があり節婦があり、何將軍の墓が何處にあるといふ樣なことは、決してそれが全然無價値であるといふのではないが、郷土教育の材料として多くの人々、殊に歴史家方面の人々に考へられて居るほど高價なものではない。それは歴史の趣味を養ふとか、日本歴史の基礎的概念を養ふとか、乃至は訓話の材料として感奮興起せしめるのに好都合だといふことは認める。併し郷土の史的研究はもつと外の方向へ目をつけなくてはならぬ。

わが郷土に於て、過去の人々はどんな生活をして來たであらうか。自然に對してどんなに順應してゐたか、そしてそれがどう變遷して今日に至つたか。自然の狀況は果して今と昔と同じであるか、人間の力で自然に對し何程かの修正變更が加へられてゐるか。昔の順應樣式は果して賢明であつたか。それとも拙劣であつたか。すべてそういふ事柄について充分正確に考察洞察することが出來たならば、將來に對する方策を立てゝも亦誤りなきに近いであらうと思ふ。

そこで城址の研究にしても、何故に城が築かれたかといふことを、單に戰術の上からのみでなくして、そのあたりの豐饒なる農場が敵味方の目標になつたのでは無いかといふ風に、經濟的に見ることをも忘れてはならぬ。強い英雄の蟠居して居た處では、民は太平の腹鼓を打つたであらうし、度々戰場となつた地方は耕地も頽廢し戰火にも燒かれて、民は疲弊し四散したといふ樣なこともある。そこが最も大切な資料である。經濟を離れて政治は無く、經濟を離れて戰爭もない。

戰爭の歷史も政治の歷史も、畢竟は經濟の歷史を基礎とし背景とするものである。

徒らに偉人の傳記を以て空虛なる功名心をそゝることを已めよ。そこはかとなき節婦義僕の傳說によつて安價な涙を流さしめるにも及ばぬ。國亂れて忠臣ありとするならば、國は何故に亂れたか、家貧しくして孝子出づるならば、何故家は貧しくなつたのか、そこに洪水・暴風・津波、地震などの自然現象が原因しては居なかつたか、天災に對する爲政者の誤つた指導がありはしなかつたか。忠臣の出るよりも國の亂れない方が幸福であり、特別な孝子は無くても家は富んだ方がよい。不忠不孝をすゝめるのでは無いが如何なる忠臣孝子も平和の世には凡人に過ぎないからである。英雄出でよと叫ぶよりも、英雄を必要とせざる世の中を要望すべきであり、而してそれは順調な自然の惠みと、それに對する人間の巧妙なる順應によつてのみ得られる。

何をどう調べるか

歷史以前の遺跡は無いか。貝塚があるならばその位置はどんな處か。昔は河の邊又は海岸であつたと推定されるか。貝の種類は淡水性か鹹水性か。石器や土器があるならばその型式によつて時代を知ることも出來るし、又その石質土質を見てどこから材料を得たものかを考察せよ。

古墳があつたらその位置樣式から、その材料は何處から運ばれてゐるかを注意すべく、又副葬品などあらばそれについても研究すべきことは多い。凡てそれ等は古代の人たちの生活狀態を知るよすがとなるものである。

地名を研究せよ。鄕名・村名・部落名など、凡てその起原變遷を明かにすべきである。併しあまりにこじつけてはならぬ。鄕土の中で最も早く開けた處はどの部分か、それはどんな位置で何といふ地名か。又最も新しく開けた部分は何處か。

舊家と云はれる家はどれか、その位置はどんな處か。他から移住して來たことの慥かな家があるか。それはどの邊にあつて職業はどう違つてゐるか。舊い家と移住して來た家とは混交してゐるか別々になつてゐるか。別になつてゐるならば風俗・習慣・言語などに多少の違ひがありはせぬか。その間には互に婚を通ずるか。

建築土木に用ひられてゐる木材や土石の類はどんな種類か、それは何處から取り寄せられてゐるか、その運搬の經路はどうか。それ等の材料は昔と今とでどう變つてゐるか、何故に變化したのであるか。近所にあつた森林が伐り盡されたゝめか、生活程度が向上したゝめに遠方のよい石材が多く用ひられる樣になつたのであるか。

主な道具に就て調べて見よ。舊い家の土藏の隅には古く用ひられて今は用ひられない道具も澤山あるであらう。例へば糸車があるならばそれは何時頃まで用ひられてゐたか。その頃は綿も附近に產出したであらう。隨つて又綿繰器や綿打器

などもあるであらう。

炊事具や食器にも種々の變遷が見られるに違ひない。手桶がバケツになつたり、土瓶がアルミニユームの藥鑵になつたり、膳が廢せられてテーブルになつたり、凡てそれ等の變遷は或は古い道具をスケッチしたり、或は古老の談話から材料をとつたりしなければならぬ。

職業用の道具にも亦變遷は著しい。農具の如き殊に近年大變化を來して、電氣や石油發動機などを用ひる樣になり、器具から機械への進展が目覺しいものがある。併し鍬や鎌などの中には數百年前と大差ないものもある。

鄕土人の生活を支へてゐる主な產業は何々であるか、それが昔と今とどう違つて來てゐるか。等しく農が主業であるとしても、昔と今では作物の種類もその栽培の仕方も大に變化してゐるであらう。昔は畑であつた處が誰かの努力によつて灌漑の手段が講ぜられ、今水田となつてゐるといふ處もあらうし、海岸の淺瀨が

埋め立てられたり、不毛の荒野が開墾せられたり、權四郎開きだとか又右衛門新開だとか、地名にもその當時の功勞者を記念してゐるものがある。谷の用水池は何時出來て何時擴張されたか。荒れ川は何時どんなに改修せられて今日の形となつたか。

都會の附近では穀作農が園藝農に變化した所もあらう。耕地がどし〳〵潰されて住宅の出來た村もあらう。都會も亦商圈の消長があつたり、商業の種類に變遷があつたりする。殊に都會の一局部について見ると、淋しいお城の濠ばたが埋め立てられて歡樂境と變化したり、街路の改正で裏町も立派な商店街となり、盛り場も寂れて住宅町になつたりすることがある。これ等は記錄を得ることが困難であるから、多くはその土地に永く住んでゐる古老の記憶にたよらねばならぬ。

道路はどう變つたか、古い道路は何處をどう通つて居て今はどうなつてゐるか。廣島市ではこれを東西に貫く幹線は年を追うて南へ南へと遷つてゐる。(「地理教材

研究」第十一輯所載、拙稿「廣島市雜觀」參照)それはデルタが次第に南進するからである。昔は峠を越えてゐた道路が、今は海岸を迂回する樣になつたとか、昔の急坂が今は七曲りになつたり、車馬だけは新道を通つても徒步の人はやはり舊道を捨てないなどいふこともある。

鄕土の異變として過去の洪水・大風・旱魃・地震・火事・津波・山崩等の事實を調査せよ。それが鄕土の住民にどう影響し、鄕土人はそれに對して如何なる策をとつたか。現在洪水や旱魃に對してどんな手段がめぐらされ、耐火耐震の建築がどれほどまで採用されてゐるか。過去の經驗から又は先覺者の努力によつて作られた防火用水路や放水路や防風防雪林や防潮堤などが、無理解な現代人のために壞されて行くといふ樣なこともあり勝ちあるから、かゝる過去の業績は充分に調査記錄して村民の記憶に止めて置かねばならぬ。

凡てこれ等變遷の跡をたづねる場合には、遠い昔のことはわかりにくゝもあり

又必要も少い。大體から云つて先づ德川時代以後に着眼するがよいと思ふ。それには傳說も比較的眞實性があり、文書記錄も亦得易い。そして若し古地圖の樣なものでも得られたならば至極結構である。古人の事蹟としては特に鄉土の生活をよりよくするために盡した人々、例へば用水路を開いたとか新地を開墾したとか、新しい產業を始めたとか便利な器具を發明したとか、凡て經濟的に活躍した人々に就て研究すべきである。

ある村の歷史（廣島縣賀茂村早田原村字風早）

萬葉集に風早浦船泊夜作歌二首といふのがあり、續日本後記に孝子風早審麻呂のことが見えてゐるから隨分古い聚落には相違ない。獨立の一村であつたが明治の中頃に大田・小松原の二村を合併し、三村の名稱から一字づゝとつて早田原村と名づけられた。併し今でも舊三村の人人の社會生活は大體に於て別々になつてゐる。

今は四百餘戶の部落であるが昔はもとより小さいものであつた。年代は不明だが古老の話では

は十七戶がこの村の草わけだといふ。その十七戶は或は死絕えたり或は沒落して他鄉に出て行つたりして、今殘つてゐるものは數戶に過ぎない。それは主として今の上條・中通・下條等大體部落の中央に近い所に住んで居た。

小字は上條・中通・下條の外に東條・西條・向條がある。この向條は川を距てた向側にあつて比較的新しく開けたらしい。そのもう一つ先に灘と稱する小字があるが、これは明治の中頃から特に發展した所で、山の麓の緩斜地で水田が少く、畑には主として甘藷が作られて住民の常食となつてゐる。主に島部の方から移住して來た人であるから、甘藷を常食とすることには慣れて居たらしい。

谷の奧には小畑・橋神等の飛び離れた部落があるが、年々戶數が減少するばかりで、多くは村の中央部附近へ移住する傾がある。

下條の海岸に沿ふて漁民の部落がある。漁師原と稱せられてこれも新しく移住して來たものである。その出來たのは德川時代の末頃で、原住地はこゝから數里東方の能地といふ漁村の附近が主であつたらしい。これ等の漁民は舊い農民たちからは一段低い階級の樣に遇せられて、名前なども多くは呼び捨てにされて居たものであるが、今ではそんな區別は無くなつた。併し

まだ婚嫁を通じる樣なことは無い。

建築の材料は概ね村の周圍の山林から得られた。屋根は元來茅葺が主で、その茅は海岸に自生して居たものであるが、戸數が增加するにつれて材料が不足して來たので、稻藁が主に用ひられる樣になり、更に生活の向上に伴ふて瓦屋根が增加し來た。瓦は始めは土藏に、それから納屋に用ひられ、最後に母屋を瓦葺とするものが次第に增加したが、今でも土藏や納屋のみを瓦として母屋のみは藁葺の家が少くない。瓦は愛媛縣の方から多く移入されてゐる。

主な產業は農業で米と麥とを主作物としてゐる。特用作物として古くは綿なども作つたがそれは印度綿のために驅逐され、今では煙草が主要なものとなつて、米國種が盛に栽培されてゐる。又明治以後除蟲菊が試みられたりしたこともあつたが、今では梨と葡萄が稍成効し、近年更に枇杷のよいのが出る樣になつた。

農閑期の副業としては冬に酒作りのために出稼するものが多く、明治の中頃以後殊に盛になつて名杜氏を輩出した。又冬に廣島市の北方山間へ樵夫木挽となつて入り込むものも頗る多かつたが、これは木材の欠乏とアメリカ式機械鋸の輸入で今は絕無となつた。夏は附近にある鹽田がよい働き場となつてゐたが、最近これも廢せられてしまつた。東條・向條等には大きな帆

船を所有して石炭の運輸を業とするものも少くない。

漁村部落の人たちは近海で雜魚をとつて居たのであるが、元來魚族の多くない處であるから村內の需要を充すにも足らず、隣村から買ひ入れて賣り歩いたりして居た。それが近年はいよ〳〵魚族の欠乏を來したので、若いものは朝鮮などへ遠洋漁業に出掛けてゐる。近頃沿岸の遠淺を利用して牡蠣の養殖を試みたが、これは遂に失敗に終つた。

村を東西に貫く道路は元來辛うじて荷車を通ずる程度のものであつたが、明治の末年に改修せられて幅も廣く勾配も緩かになり、大正の末頃から自動車も通ふ樣になつた。海の交通は比較的不便で、發動機船の寄航する樣になつたのは大正以後である。近く鐵道三吳線が開通したら、こゝにも驛が置かれることになつてゐるから、交通上に一紀元を劃することになるだらう。

旱魃でひどく困つたのは明治二十三年であつた。その後非常に大きな溜池をつくつた。洪水は明治三十六年のがひどくて、幅僅かに二三間の小川が數十戸の民家を押し流した。併し流された家は又もとの位置に改築せられてゐる。地震の害は新しい記憶に無いが、落雷は數回あつて火事や死人も出來たそうである。それは皆海岸寄りの平地の部分であつた。

人口

人口の總數

市町村を單位とする人口の總數は役場に行けばすぐに材料が得られるが、併し統計は三樣四樣に出てゐるから一通りその性質を明かにせねばならぬ。簿上調査としては本籍人口と現住人口があり、實地に調べたものには、國勢調査の人口があり、又村によつては別に職業戸口調査の人口といふものもある。

本籍人口といふのは戸籍上の在籍者を數へたものであるから、勿論實際の人口とはかけ離れてゐる場合が多い。この本籍人口から屆出による出寄留・入寄留を加除したものが現住人口であるが、屆出が嚴重に行はれてゐないために、これも亦頗る便りない數字となることが多い。併し田舍では村人の動靜が誠によくわかる

ので、熱心に寄留簿を整理すれば現住人口は稍正鵠を得る筈である。

人口の都市集中は近年殊に著しいから、都會では本籍人口は現住人口よりも少く、田舍ではこれに反するのが普通である。そこで本籍人口と現住人口との比率を求めて見ることも決して無意味でない。廣島市の昭和四年末本籍人口は二一八、八一四で現住人口は二七三、三三八であるから、前者を百とすれば後者は一二七となるが、市の南方の島にある佐伯郡沖村の昭和四年の人口は、本籍六一六二に對し現住三四五〇で、その比率は五六にしかならない。沖村は非常に人口稠密で、而も土地瘠薄で生產はその人口を支持することが出來ないため、阪神及び關門方面への出稼者が非常に多いからである。

國勢調査の人口は實地調査であるから最も正確であるに違ひない。そして已に大正九年から三回も行はれたので、この十年間の趨勢を考察するにも極めて重要なる數字である。たゞこゝに一つ注意すべきことは、十月一日といふ特定の時刻

に於ける調査であるから、場合によつては必ずしもそれが常態で無いかも知れない。廣い區域に亘つて考へるときは何處へどう移動して居ても差支ないわけであるが、極めて一局部の鄕土のみについて考へる時は、何か特殊の事情でその時だけ多くなつたり、又は少くなつてゐた樣なことがあるかも知れないからである。

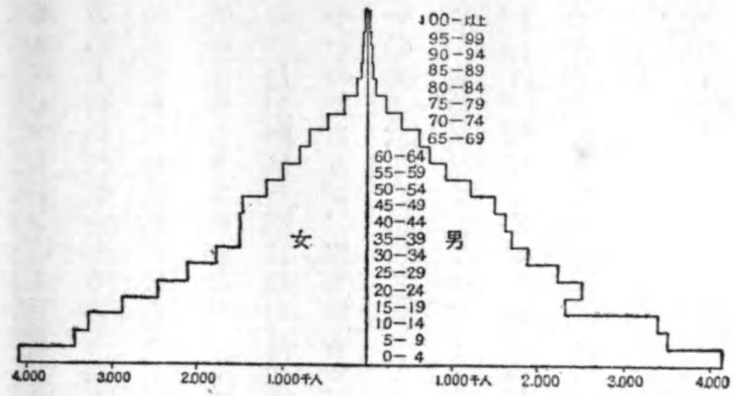
又國調の人口には艦船・刑務所などの人員も入つて居るから、それ等も現住人口とは違つた數字を出す原因となる。隨つて又一世帶平均の人口などを計算するときは、かゝる準世帶だけは省いて算出しないと正鵠を失する。

職業戶口調査といふのは又別途の方面から推計するものであるから、或村では餘程正しいといふ場合もあるけれども、又甚だ覺束ないこともあり得るので、無批判であまり信をおくわけには行かぬ。

人口の構成

構成とは人口がどんな內譯から成つてゐるかといふことで、總數を更に區分してその人口の內容を知るのである。構成に種々あるが最も重要なものは性構成、年齡構成及び職業構成である。

性構成即ち男女の割合は、通例女百に付男何程といふ比率で示すことになつてゐる。わが國は全體についていふと昭和五年に男が一〇一となつてゐて女が僅かに少いのであるが、地方によつて著しい違ひがあつて、東京は一一一・八、北海道は一〇九・三、大阪府は一〇八・九であり、反對に沖繩縣は八九・五、鹿兒島縣は九三・八、長野縣は九四・一である。男子が著しく多いのは他から集つて來てゐる場合が多く、女子が多いのは大抵は男子の出稼者の多いのに原因する。併し時として女子の集つて來てゐるといふ樣な場合もある。紡績・織物等の工業が盛な地方によく見る現象である。鄕土人口の性構成が全國の平均よりも著しく異なる場合、必ずその原因を考察しなければならぬ。



第九圖　年齢構成ピラミッド　内地人口（大正十四年國調）

年齢構成とは年齢別の人口のことで、通例五歳毎に統計が出てゐる。即ち〇歳乃至四歳までのものが何人、五歳乃至九歳までが何人といふ風にするので、これを男女に分つてグラフを作ると、上圖の樣なピラミッドが出來る。このピラミッドの形はそれ〴〵の民族に特有のもので、乳兒の死亡率が少ければ兩脚は長くつき出で、高齢者が多ければ峰は膨れて來る。而して壯年者が少ければ斜面は凹形を呈し、壯年者が多くて幼兒が少ければ斜面は凸形を呈して全體がドーム形となる。鄕土に於ける人口のピラミッドが、こゝに示したピラミッドとど

う違ふかと云ふことによつて、その鄕土の特異性を見なければならぬ。

或部落のみの人口に就てこんな詳しい年齢調査が出來て居ない場合は、カードを作つて各戸につき兒童をして調査せしめたらよい。若しそれが困難な事情があつたら、單に十四歳以下と六十歳以上と、その中間との三階級に分つて調べてもよい。十四歳以下を兒童、六十歳以上を老人とし、十五歳以上五十九歳までを生産年齢と名づける。生産年齢の人口が全人口に對して何程の割合であるかといふことは、その地の經濟形態を見る上にも重要なことであつて、全國について計算するとそれは五四・五八％となつてゐるから、それより大であれば壯年者の集つてゐることを示し、小であれば壯年者の出稼の多いことを物語ることになる。都會は壯年者の數が大で田舍は小であるのが普通である。

職業構成については老人や子供の樣な職業を有しないものも多いので、これを無業者と名づけて或有業者に從屬せしめる。即ち農家の子供は農業人口中の無業

者であり、商家の老人は商業人口中の無業者である。家事に從事する主婦や下女なども亦無業者の中に入れるが、農業なり商業なりを實際に手傳つてゐるものは有業者に計算するので、その區別限界は頗る不明瞭を免れない。

又職業に主業と副業がある。これはその双方で計算するから、同一人で三つの職業を有するものは三人に數へられることになる。故に副業人口を除いて主業人口のみを合計しないと總人口と符合しない。ところで主業副業の區別は時として頗る曖昧であり、どちらが主業でどちらが副業であるか本人にさへも判斷のつき兼ねることがある。

又副業に從事するものゝ本業が何であるかは統計に出て來ないから、例へば水産を副業とするものが若干人あるとしても、それは農業者が副業としてゐるのか工業者なのか全くわかり樣が無い。故にそういふ細かい職業關係については、どうしても兒童を働かせて實地に調査する外はないのである。

職業の種類は農業・水産業・鑛業・工業・商業・交通業・公務自由業・其他の有業及び無職業に分つことになつてゐる。林業や牧畜業は農業の中に含まれてゐるのである。

人口の變動

人口は常に動いてゐる。一刻と雖も靜止しては居ない。而してその動き卽ち增減には二つの事情がある。一つは出生により增加し死亡により減少するものでこれを自然增減と云ひ、一つは出寄留入寄留によるものでこれを移動增減といふ。

年々の出生は田舍では多くの場合本籍人口について調べてあるから、これは必ず現住人口に對するものを調べなくてはならぬ。それは役場の帳簿からわけなく計數できるものである。都市に於ては現住人口に對する數が調べてある場合が多い。死亡についても亦同樣である。

出生死亡率は一年間の實數をその前年末の人口で除して、千人に付いくらと計算するものであつて、全國について云ふと出生率は三十四人内外、死亡率は二十人内外、その差增は十四人内外になつてゐる。この外尙死產が二人内外あるがこれは考慮に入れなくてよい。そこでこの出生率や死亡率については、横に他の町村なり縣下の平均なりを比較することも必要であり、又縱に過去に遡つてその增減の模樣をも調べねばならぬ。そして出生率が特に增加したとか、死亡率の非常に多い年があつたとかいふ場合には、必ずその原因を考へて見る必要がある。殊に死亡率は傳染病等のために年々の不同が甚しいのを常とする。又出生率と死亡率とが鄕土の各地區によつて違ふ樣のことがあれば、環境との關係について考究を要するから、各地區の率を圖上に記入して見るがよい。

何歲の死亡者が多いか、五歲每に勘定して比較して見よ。又一歲未滿の死亡者は全死亡數の何割にあたつてゐるか。この乳兒死亡率は都會地に於て特に多い傾

向があるから、その大小及び年々の增減は注意すべきである。而して乳兒死亡率が多いならば、產婆の數を調べて出產數に對する割合を見るとか、母親の工場勞働に從事するものが幾人あるか、託兒所はあるか、死產が特に多くは無いかといふ樣なことも研究して見ねばならぬ。

移動增減については何處へ出て行くか何處から入つて來るかを見ねばならぬ。それは寄留簿によつて計算すればわかるが、都會地では無屆の寄留者が多いから正しい數字は中々出て來ない。田舍では比較的正確に近いが、たゞその中に極めて一時的のものと半永久的、若くは全く永久的のものとがあることに注意しなければならぬ。老人と子供を殘して壯年者が出て行くのは多くは一時的又は半永久的であるが、全家寄留は永久的の場合が多い。又何か土木工事が起されたために朝鮮人の勞働者が入り込んだとかいふ樣な場合は、全く一時的の現象に過ぎないが、年々農閑期などに一定の方向に出稼して、何ヶ月かの後には必ず歸つて來る

といふ季節的移動については、全く寄留簿にあらはれて來ないから別の方法で實地調査でもしなければ判明し難いであらう。

尙移動增減は男女の別、年齡別、職業別についても見なければならぬ。又出て行く方面入り込んで來る方面はどの方向であるか、距離、交通機關等についても考へ、季節的移動にあつては兩地の氣候や經濟形態についても比較すべきである。概して云へば寒い地方から暖い地方へ、雪の多い裏日本から晴れた表日本への移動が著しい。

又大都市に於ては晝は周邊から中心部に向つて人口が集中し、夜は反對に四方に分散する。故に晝間人口と夜間人口とを調べる必要があるが、これは實地に調査しなければ統計が出來てゐない。

人口統計の最古のものをさがし出せ。それは極めて不正確なものでも大體の傾向を知ることは出來る。そして最近に至るまでの增減の模樣をグラフに示すがよい。この場合勿論市町村の合併や分離があつたら、人口の總數も亦これに應じて加除して示さねばならぬ。而して人口は增加の傾向か減少の傾向か、或は又停止の狀態かを見よ。又一時的に特異な變動でもありはせぬか、それが戰爭・地震・傳染病・飢饉などといふ樣な天災人災と關係しては居ないかを見よ。

密度と飽和點

人口密度といふものは一縣一國といふ樣な廣い面積について計算するならば兎も角、一市町村といふ樣な狹い區域について計算する時は極めて無意味なものになる。何となれば行政區劃の中には廣い無住地域を含む場合と含まない場合とがあるからである。試に奥羽地方の各市について計算して見ると、昭和四年末の人口一方里の平均が若松市は一四一人、青森市は一一三人であるが、秋田市は六二人、山形市は五三人であり、更に盛岡市は一七人、八戸市は一三人に過ぎない。

若松市が八戸市の十倍以上の密度であるといふことは、兩市の市域内に多くの田園を含んでゐるとゐないとによるもので、聚落としての都市の人口密集度に十倍の差があるといふことにはならない。田舍の場合でも同樣である。

廣い地域について計算する場合でも、沙漠とか凍原とかを含む場合には同樣の不都合を生ずる。南極の廣い無人地域を太洋洲の中に入れて計算することが何を意味するか。サハラの沙漠もシベリヤの凍原も同樣である。そこでフリードリッヒは森林除外法を提唱し、森林地を除いた面積で人口を除すべきだと說いた。併し日本の森林の如きは殆ど殘らず何程かの經濟價値を有し、文化的行動の範圍内に入つてゐるからこれを除外するのも聊か不穩當である。それのみか一面に於ては海面の一部をも陸地に加算して密度を計算したい場合がある。海苔や牡蠣の養殖地の如きは殆ど陸地の畑にも相當するものであるから。（拙著「人文地理學講義」上卷二三六頁參照）

そこで平均密度よりも、どの地域にどの程度に集積し若くは散在するかを知ることの方が有意義となる。人口の分布圖をドットで表はす方法はそのために考案せられた。これは狹い鄕土について製圖する場合には、單に民家の所在に一戸一點として記入しても大體の傾向を知ることが出來る。

大都市の一部分について見る場合や、田舍でも全地域に比較的平等に散在してゐる場合には、その面積對人口の割合を算出するのも決して無意味では無い。又農村にあつては田畑の面積を基本として、一戸平均の耕地面積を算出するといふ樣な方法もある。この場合山林や牧場や漁場等についても、別々に一戸當りの面積を算出したらよからう。

人口の密度が最大限何程まで可能であるかといふことは、その土地の經濟的價値の如何によることであるから數字を以て表はすわけには行かぬ。隨つて其の地の人口密度が果して飽和點に達してゐるか、それとも尙包容の餘力を存してゐる

かは、人口とこれを支持する地積との關係から見なければならぬ。即ちその村の生産力のみを以てその村の人が生活してゐるか、他村へ通勤するものがあるか若くは他村から毎日入り込んで來るものがあるか。又長期に亘る出稼者からの送金がその村の人たちの生活費を補助してゐるか、或は反對にその村で儲けて他へ送金するものがあるか。若しその村の生産力によつて他村の人までも養つてゐるとすれば、人口の包容力は尙餘裕があるわけであり、又出稼者からの送金や他村へ通勤して得た收入がその人口を支持してゐるならば、それは已に人口が飽和點を越えて正に過飽和になつてゐると云はねばならぬ。

それは決して土地の面積にのみよるものでは無い。位置といふことが極めて必要である。都會地に就て考へて見ると、商工業の盛な地域は小面積でも多くの人口を支へ得るが、住宅地の如きは殆ど全く人口支持力を缺いでゐると見なければならぬ。東京日本橋の四つ角の煙草屋は數平方米の小面積を占めて居るに過ぎな

いが一日數千圓の賣上があるといふ。それには地代や家賃や權利株の代などで失費も多いであらうけれども、兎に角數人の生活を立派に支へ得ることは慥かである。これに反して琵琶湖の沖島では島内の耕地のみでその人口を支へることが出來ないから、男子は多く漁業を營み、女子は對岸の本陸へ出作りをしてゐる。こんな例は人口の稠密な島嶼部に於て殊に多い。（拙著「農業地理學」二〇〇頁參照）

ある村の人口（廣島縣安藝郡渡子（とのこ）島村）

國勢調査による人口は大正九年に三九五五で十四年には四〇二一に增加してゐたが、昭和五年には再び十年前と同數の三九五五となつた。併し最近の出產率は三五・二で死亡率は一四・〇五であるから、自然增加は二十一人以上になつてゐるのである。故に人口が停止してゐるのは離村者の多いためであると見ねばならず、少くとも人口は已に飽和點に達してゐると推察することが出來る。

そこで本籍人口を見ると五八二三であるから、現住人口はその六八％にしか當つて居ない。

それは多く阪神方面に出稼してゐるのである。尤もこの出稼には全戸引越も多く、單身出稼もあるけれどもその出稼先から送金するといふことは比較的少い樣である。

性構成を見ると女百に對し男九八・五であるから、男子が多く出て行つて女子が殘つてゐることがわかるし、年齢構成から見ると生産年齢が全體の四八・五%に過ぎないから、如何に多くの壯年者が出て行つて老人小供を殘してゐるかといふことがわかる。

ところで村の耕地面積は極めて狹く、一人平均四畝七二に過ぎない。而も田よりは畑の方がずつと多く、それは大部分が三十度内外の急斜地に設けられた階段畑であり、花崗岩の風化土で大部分が侵蝕面であるから土質は瘦せて生産力は頗る低い。而も農業樣式は低級で米と麥とを主作物とし、呉市が近いにも拘はらず野菜園藝が盛でないのは、土地が北方に傾き冬の北風を眞受けにするからであらうか。隣村には柑橘なども多いのにこの村にはそれも殆ど見られないのである。

それかと云つて水産も微々たるものであり、林産・鑛産等は殆ど絶無に近い。この貧弱な土地の上に、この多數の人口が何によつて支へられてゐるであらうか。生産力を調べて見ると一戸平均百九十九圓、一人平均四十三圓といふ小額で、隣村に比べて二分の一乃至五分の一である。又所得税の高を調べて見ると一世帶平均僅かに二十二錢で、隣村の五分の一乃至十分の一に過ぎない。

それならば富の程度が非常に低いか、生活程度が他村に比して著しく低いかといふと必ずしもそうでない。村を歩いて見ると、この五年か十年の間に新築せられたらしい家が頗る多い。家はさほど富有に見えるといふわけでも無いが、兎に角瓦葺が多くてあまり貧弱では無い。小學校の兒童の服裝を見ても比較的整つてゐる。給食せねばならない兒童だの、教科書を與へねばならないだのといふ樣な貧困兒は無いといふ。道路も島としては珍らしい三間幅の立派なものが村を貫いて半分ばかり出來てゐるし、海岸は到る處小埋立地ばかりで自然の砂濱や岩濱は全く見られない。二十年前には主要道路は丘陵の中腹を通じ、村の中心は中腹の畑の中にあつたが、今では海岸の埋立地に移つてしまつて、中腹の村は却つて寂れつゝある。

そこで村人の生活は主として何によつて支持されてゐるかと、土地の人々に聞いて見るとそれは主として村以外からの收入によるのだとわかつた。即ち呉の海軍工廠への通勤職工が約三百人あつて、その收入が一人平均千圓、總額三十萬圓であり、大柿町の紡績工場への通勤者三十人、收入總額一萬五千圓である。又帆船を所有する石炭運送業者が頗る多いので、その持ち

歸る運賃收入も少くないらしい。

農産の總額は八萬圓、水産三萬五千圓に對して、職工の收入は三十數萬圓に上つてゐるのであるから、この鄉外收入を除いたならば、支持し得る人口は現在の半數以下に減ずるであらう。隨つて呉工廠が擴張され、大柿の紡績工場が益ゝ盛になれば、もつと多くの人口を收容し得るであらうけれども、鄉土としては已に包容し得る人口の二倍に近い人口を容れてゐるのであるから、極めて强度の過飽和狀態にあるものと云ばねばならぬ。

環境

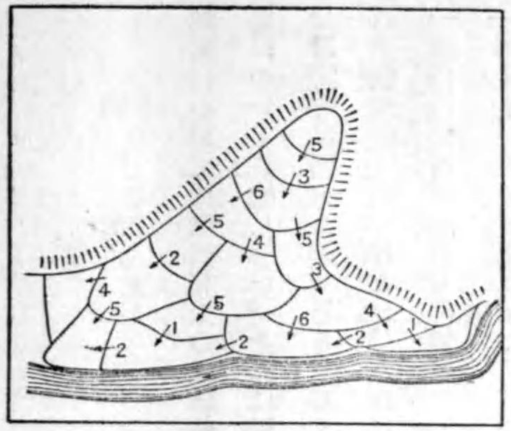
微地形

地形については已に鄉土の立地研究の項に述べたが、更にもつと細かに鄉土の地形について觀察したい。それは川のほとりとか山の麓とか云ふことよりも、もう一層精細に調べるのである。即ち普通の地形圖にはあらはれない微細な地形、これを微地形と名づけるが、それに就て出來るだけ精密に調べ、能ふべくんば高距一米毎の等高線圖でも作製したいものであるが、それは勿論容易では無い。

一寸した堤防が何程の高さがあるか、堤防の內と外とで何程の高さの差があるかといふ樣なことは、ハンドレベルで測ればわけなく知ることが出來る。ハンドレベルは價四五圓位のもので、自分の目の高さと同高の地點が見通される樣にな

つてゐる。

傾斜地に水田がある場合には、一枚一枚の田は完全に水平であるから、上の田と下の田との水面を標準に高距を測定することが出來る。併し畑の場合には何程かの傾斜があるから、各段の高さのみでは高距はわからない。どうしてもハンドレベルによらねばならぬ。ところでこうした田や畑のある場合に、その田畑の境界線、即ち階段といふものを全く無視して等高線を引いたところで、それは實際の地形を表現するもので無いから、寧ろ高さそのものは幾分不明瞭でも田畑の形そのまゝを圖面に表はし、その高低あるものは境界線上に高い方から低い方へ向つて矢の印を書き入れるがよい。それはつまり水の流れ落ちる方向を示すことになつて、實際の地形が大體そのまゝに表現される。矢の傍に高さの差を記入すれば一層完全である。



第十圖　谷の水田地形

地面の傾斜はクリノメーターで測ればよい。山の側線などは遠方から眺めて、片眼を閉ぢてクリノメーターの一邊と山の側線とを一致せしめると、すぐにその傾斜の度を讀みとることが出來る。比較的傾斜の緩かな道路などならば、路面に適宜の板を置いてその上にクリノメーターを載せて見るのである。又鐵道の傾斜は線路の傍に標木を立てゝ示してある。即ち一〇〇とあるのは百分の一の勾配、つまり一米について一糎の勾配といふことを示したもので、Lとあるのはレベル即ち水

第十一圖　クリノメーター

傾斜角度	概略の分數
1	1/60
5	1/12
10	1/6
15	1/4
20	1/3
30	1/2

平の意味である。分數で表した傾斜と角度との關係は大體前表の通りである。

郷土の地圖を地面の傾斜によつて塗り分けて見よ。五度以下、五度乃至十五度、十五度乃至三十度、三十度以上の四種に分つて着色すると、傾斜と開拓景との關係などが明瞭になる。

都市にあつては殆ど水平の場合もあるが、又極めて複雜な地形を呈するものもある。水平の樣でも極めて微細な高低はあるもので、それは洪水の時などによくわかる。又家屋の土臺は水平なものであるから、それと路面との關係を見れば傾斜の度は明瞭になる。石段のあるところではその一段の高さと段の數とで高距差を知ることが出來る。

長崎とか呉とかの樣に山麓の斜面に向つて這ひ上つてゐる市街にあつては、一軒一軒の屋敷毎に一段づゝ高くなつてゐることもある。そんな時の微地形の圖示法は前記の傾斜地の水田と同樣でよい。東京の山手の樣な複雜な波狀地にあつて

は、高距一米か二米毎に等高線をひくとよいのであるが、それには測量の技術が必要であるから小學校の兒童などにはとても出來ない。併し詳しい街路の平面圖をつくつて、實地と對照しながら分水線を記入せしめる位のことは出來る。雨天の日に觀察して街路や屋敷のあらゆる部分に分水線を記入すると、それによつて細かい地形が明瞭になるものである。

微地質

郷土の土地を構成する岩石がどんな種類で、その走向傾斜がどうなつてゐるか。どの地層がどんな時代で、そこにどんな化石が含まれてゐて、どこにどんな構造線があり、どんな火成岩がどの時代に迸發してゐるかといふ樣なことは、もとよりその地の住民の生活に無關係のことでは無いが、併し一面から見ると、人間生活にもつと直接的な影響を及ぼすものは、それよりも一層微細な地質の狀態にあ

るといふことが出來る。廣島縣賀茂郡早田原村の海岸に白杭といふ地名がある。そこには白色の粘土と礫岩との互層があるが、その一部には非常に良質の粘土を産し、吳軍港の船渠築造にあたつて多量の需要があつた。其後ホロタイルの工場が出來て大規模の製作をやつてゐたが、間もなく財界の不況と原料の缺乏とで中止されてしまつた。白い粘土は附近にいくらでもあるが、ほんとに良質のものは極めて一局部にしか出ない。こんな例は到る處にある。瓦を燒くによい土、煉瓦を作るに適した土、陶器に適した土などはその物理的幷に化學的の性質に小異があつても、すぐに出來た品の質に大きな影響を及ぼすものである。

百姓に聞いて見ると、田や畑の土質といふものは到る處非常な相違のあるものである。それは實驗室の試驗管には到底あらはれない樣な微細な相違でも、作物の出來の上には極めて重大な影響を及ぼすものである。梨や葡萄を植えても、道路一つを隔てゝよく出來る畑と出來ない畑とがあり、甘藷や西瓜を作つても、隣

り合せの別の畑では全然味が違つて居たりする。一枚の田でさへ或一局部のみどうしても稻の出來がよくないといふ樣なことがあるのは、何が原因であるか確かなことは不明であるが、多分地質上の微細な相違によるものであらうと思はれる。

地價は明治の初年に土地の賣買價格として評定せられたもので、大體はその地の土質のよしあしと比例してゐる。そこで村内の地價を調べてその分布圖を作つて見よ。又米なり麥なりの反當收穫量を計算してその分布圖を作つて見よ。多分その二つの圖の間には密接な相關の樣相が窺はれるであらう。

都會に於ける地價若くは土地の賣買値段は、其の地の位置といふことが最も强い要素となつてゐるから、土質には關係の無い場合が多い。そこで都會の地質研究は別の方法によらねばならぬ。建築や土木工事のある時には、そこに行つて地質を研究せよ。地下から粘土が出るか砂が出るか、小石が交つてゐるか。その小石が丸味を帶びてゐたらそこは必ず沖積層か洪積層かである。そんな地盤は地震

の時に強く感じるのが常である。併しあまり深くない所に堅岩があれば地盤は安定である。新に井戸の掘られる場合などがあつたら必ず何米までどんな土であつたかを調べて、垂直の地層斷面圖を作るがよい。

都會では屋敷には地上げを行ひ路面にも土砂を敷くから、その地の本來の地質とは違つた表面を有するのが常である。そこでこれ等の被覆土が何處から持つて來られるか、位置と交通機關との關係によつて、同じ都市でも部分部分の表面土質が違ふことになる。これ等も調べがつくならば色別けにした地圖を作ると面白いであらう。

微氣候

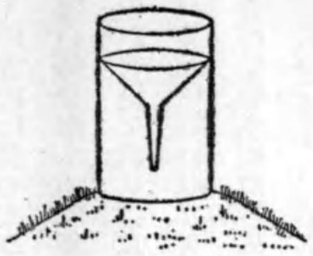
わが國の樣に地形の複雜な國にあつては、測候所の觀測成績なるものは、その測候所の所在地たる極めて狹い範圍に適用せられるだけで、そこから三粁五粁を

離れたら屹度著しい違ひを示すであらうと思はれる。その測候所が山の蔭にあつたり市街の眞中にあつたりする場合は殊に甚しい。試に日本の等壓線及び風向圖を見ると、風の方向が決して等壓線に直角にならないで、實に不規則極まる思ひ〳〵の方向になつてゐるのに一驚を喫するであらう。風が山を越える時には、最も低い部分即ち峠の部分に集中する傾があり、谷があれば風はその谷に沿ふて吹くのが普通である。又盆地に吹き込む風は旋風の樣に廻つて吹くこともあるから、極めて近距離の地でも風の方向が反對してゐる樣なことがある。

これ等微氣候の研究はわが國ではまだあまり試みられて居ない。故に鄕土の微氣候については、兒童を使つて同時觀測を重ねて行かねばならぬ。寒暖計を與へて朝の六時、晩の六時、休暇の日には午前十時と午後二時とに觀測させるがよい。土地の高度、斜面の方向、日照の大小、その他色々の事情のために各所の氣溫に屹度小異があるであらう。寒暖計は必ず室外に持ち出し、直接日光にあてな

い樣にして、三分間位團扇で球を扇いだ上で、その度盛を讀みとらねばならぬ。こうして一日の平均、一ヶ月の平均、夏三ヶ月の平均、冬三ヶ月の平均、或は朝の溫度、晝の溫度といふ樣な種々の數字を算出して、地圖の上に表示すると面白い結果が得られよう。

雨量も亦同樣所によつて大差がある。殊に夏の夕立などは馬の背を越さぬといふ譬の如く、同一村内で降つたり降らなかつたりする。山寄りの部は多量の降雨があつても、平地の部には何等の潤ひもないといふ樣なことは殊に多い。そこで各所に雨量計を備へるとよい。雨量計と云つても簡單なものでよい。直徑二十糎位の圓筒形の燒物か又はトタン製の壺をつくり、地面に少し土を盛つてその上に据え、附近には成るべく短かい草を植えて置く。少くともその周圍十數米以内には建物



第十二圖　雨量計

や巨木の無い方がよい。市街地ならば屋根の上にでも裝置すべきである。壺の中に圖の樣に漏斗を入れて置けば愈々完全である。雨が降り止んだらすぐに漏斗を除いて、溜つた水の中にメートル尺を立てゝその深さを測るので、無論壺は口徑と底の直徑とが同一であること、底が平らであることを要する。

雪は雨と違つて吹き溜りといふことがあるから、地形や地物の關係で一層差異が甚しい。そこで兒童各自にその家の附近に於ける最大の深さを報告させるとよい。雪の長く積つてゐる地方では毎日その深さを測らせること、又降り始めた日、根雪となつた最初の日、融けて地面の見え始めた日、全然融けてしまつた日等をも記錄せしめねばならぬ。それが村内の部分々々で多少の相違でもあれば、必ず地形とか地物とか、土質その他各種の事情を考慮してその原因を探るべきである。

微氣候の觀測はかゝる直接器械によるものゝ外に、梅や櫻の開花日を調べるとか、土筆やつばなの出る時期の遲速と云つた樣に、動植物の狀態によつて間接に

觀測することも亦必要である。

早朝の氣溫分布（長野縣上諏訪町及びその附近）

自動車の側面、地上約一・五米の所に棒狀水銀寒暖計を取付け、自動車を走らせ乍ら一分間に約二回の割合に溫度を讀んだ。車の進行速度は成るべく一定して一時間十五粁內外とし、三人の觀測者が乘り込んで、一人が適當な測定地點通過の合圖をする共にその位置を地圖に點記し、一人がそれに應じてその時の溫度を讀みとり、一人が書き取ることにした。かくて町の內外で十一月三十日午前六・三〇から七・一五までの間に約八〇の地點で觀測した。又自動車の通じない地點の氣溫を知るためには、中學校の生徒二十人を使つて十六の觀測組をつくり三二個所の氣溫をそれ〴〵六時四〇分と六時五〇分との二回に觀測した。

測定した時間は日出前で日光の直射が無いので太陽輻射による誤差もなく、又氣溫も一日中の最低に近く且時間による變化が比較的少い。併し尙若干の變化を免れないから研究事務所の百葉箱中の自記寒暖計の讀みから六時三〇分の氣溫に補正した。けれども尙種々の事情で〇・二度以下は嚴密に比較出來ない。

この觀測の結果によつて次の結論が得られた。

一　諏訪湖岸地方は高溫である。これは湖水の放熱によるのである。

二　西南に面した斜面・谷底は高溫である。夜中吹く弱い西北風に對し、山蔭の位置にあつて擾亂されないで暖氣が下方に停滯するからであらう。

三　市街地は高溫である。風による擾亂が妨げられるのと、人烟が氣溫を和げるからであらう。ウィーン市では人工熱量は太陽輻射熱の四分の一であり、ベルリンでは三分の一に達するといふ報告がある。

四　最も低溫であるのは開濶な西方水田地である。

五　溫泉の影響は局部的であるがそこではかなり著しい。町の南半では人家の最も稠密なのは國道の兩側であるが、溫泉地帶は少し西に偏し稍人家が粗で畑の多い所である。然るに等溫線は最も人家の稠密した所よりも、寧ろ西に偏して溫泉地帶と大體一致してゐる。これから見て溫泉はその最も中心部ではかなり受熱に貢獻してゐるものと思ふ。（「地理學評論」第七卷第三號所載、吉村信吉氏三澤勝衞氏「上諏訪町附近の早朝の氣溫分布」による。）

開拓景

生産地域

郷土の地圖を水田は黄色、畑は褐色、山林原野は緑色に塗れ。そうしてその分布の狀態をよく見よ。これを前に記した傾斜區分の地圖と重ね合せて見ると一層面白い。どんな部分に田が多くどんな部分に畑が多いか。地面の傾斜からすれば急峻なほど水田の構築に不便であるが、一面には水利といふことがあるから丘陵の頂上などにある平坦地には水田が出來ない。水さへあれば四十五度位の傾斜まで水田が出來るが、それ等は稀に見る例外的のもので、先づ十五度以下の場合が多く、それ以上は多く畑になつてゐる。そして四十五度にもなれば畑を作ることも困難であるから、森林又は原野となつて人力の加はることも少く、生産力も一

段と下るのである。

田や畑の形も亦地形の影響を受けることが大である。傾斜地では幅の狹い階段的の耕地が出來、平地では方形に近いものが出來る。矩形の畑は道路に沿ふ時は短邊をその道路に接することが多く、川に沿ふ時は長邊をこれと並行させることが多い。谷頭では段畑はコントルの樣な形に彎曲する。出來得ればこれ等耕地の區劃は一々スケッチして置きたいものである。

水田と水との關係は極めて重要である。灌漑用水の水源、水路、及びその灌漑地域を明かにした「灌漑系統圖」を作れ。或區域は二個以上の灌漑用水源を有し、普通の場合には甲の水源から、旱魃の際には乙の水源から灌漑するといふ樣な場合もある。水源が河であればその河の水量と取入口に於ける最大取入量とを研究すべく、溜池であればその貯水量を調べ、それ等と雨量及び蒸發量との關係等についても研究しなければならぬ。

用水路を流れる水の分量を測るには、水路の幅と水深とによつて水の横斷面積を求め、これに一定時間の流速を乘じたらよい。流速は水路の中央部が最も早く兩岸及底の部は遲いものであるから、中央と岸との中間の附近を測れば大體平均の速さを求めることが出來る。

旱魃に際しては何處が最も早く水の缺乏を感ずるかを調べよ。水の干上つた田、割れ目の出來た田、白くなつた田に區別して圖示するとよい。どんな旱魃にも決して乾かないといふ樣な田は極めて稀に存在するもので、その位置を古老に尋ねて理由を考察しなければならぬ。

地下水の高さの分布も亦極めて重要である。村内の凡ての井戸についてその水面が地表下何程の處にあるかを測れ。それは成るべく早朝、まだ水を汲み上げぬ間に測定しなければならぬ。それは地下水のヘッド即ち水準面であるから、出來得ればこれを地圖上に記入して地下水面の等高線を引くとよい。併し地勢の關係

その他によつて井戸の分布が偏してゐる場合にはそれは困難である。又地下水面の位置は降雨のために著しく變化するものであるから、井戸の水面測定にあたつてはこれを考慮する必要があるし、掘拔き井戸(鑽井)は第二地下水の上昇してゐるものであるから除外しなければならぬ。

田と畑と宅地と山林との總面積を調べ、それ等が鄕土の全面積に對する割合を算出せよ。それは隣接町村とどう違ふか、所屬府縣の全平均とどう違ふか。全國の平均は耕地が一割五分八厘、牧場原野が八分八厘、山林が五割一分一厘、雜地が二割四分三厘である。又耕地の中の田と畑との割合は前者の百に對する後者八十五となつてゐる。これと比較して鄕土の開拓度を知るべきである。

土地臺帳による各地目の面積には實際と符合しない所が多いが、昭和四年には全國に亘つて農業調査なるものが行はれた。これは國勢調査と同樣に同年九月一日午前零時現在の狀況を實地について調査したもので、田及び畑を自作と小作と

種別		總數	自作地	小作地
田		3,192,116町	1,430,234町	1,761,381町
畑總數		2,705,977	1,631,895	1,074,082
普通畑		1,882,655	1,062,712	819,942
樹木灌木栽培畑	總數	823,322	569,182	254,140
	桑畑	688,276	468,542	219,733
	茶畑	25,603	19,358	6,245
	果樹畑	77,865	57,602	20,263
	其他	31,576	23,678	7,898

全國農業調査結果（昭和四年九月一日）

に別ち、畑は更に普通畑、樹木灌木栽培畑（桑畑・茶畑・果樹畑・其の他の畑）に分つてその面積が出てゐる。人口に於ける國勢調査と同樣、最も正確な耕地面積として大に利用すべきである。

更に鄉土に於ける耕地擴張見込面積が何程あるか、それはどんな所にあり、何故今日まで開拓せられないで居たか。耕地整理が行はれてゐるか。整理前と比べて田畑が何程增加し、池沼畦畔等が何程減少したか、それ等は役場について材料を得ることが出來るであらう。

不生産的占有

家屋・道路・運動場・空地・公園等は土地の不生産的占有と名づけられる。故に都市に於てはその周邊地に蔬菜畑や養鷄場などがあるのを除けば、大部分の土地が悉く不生産的に占有せられてゐると云つてよい。尤も工場などはそこが生産のために利用せられてゐるものであると云つてもよく、商店の如きも或意味からすれば生産地域と見ることが出來るけれども、これ等は土地の表面をその本來の任務たる動植物の育成といふことから奪つて、人間の勝手な使用に任してゐるのであるといふ意味から、やはり不生産的占有と見做すことになつてゐる。

そこで都會地の開拓景は、その不生産的占有を更に類別してその各々の廣さと位置とを見なければならぬ。即ち同じく家屋と雖もそれが商店であるか工場であるか將又住宅乃至は官衙學校等であるか。商業と云つても物品販賣業もあれば旅

館・飲食店・理髪店等の接客業もあり、運送業・金融業・仲介業・代理業など千差萬別である。工場にも亦時計や自轉車の修繕、菓子の製造、指物業などの様に店頭に於て行ふ小工業と、大規模に特設の工場に於て行ふ大工業との區別がある。

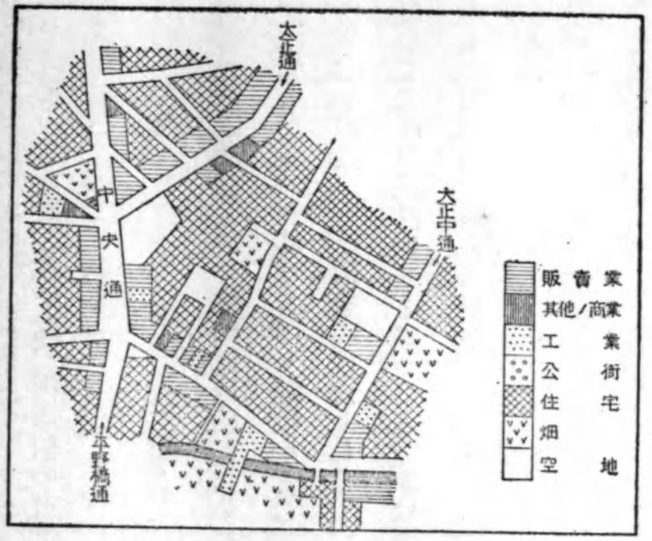
わが國ではまだ商店と住宅との區別が明瞭になつてゐないので、住宅を伴はない純粋の商店と云へば百貨店とか銀行會社の類に見るのみである。そこで全然住宅として使用されない建物の面積を調べることは頗る困難であるが、商店を兼ねない純粋の住宅のみがどれだけあるかは容易に知ることが出來る。即ち家の表口に於て何等商工業的な仕事が行はれて居ないならば、たとひ裏の方で内職的に小工業が行はれて居ようとも、それは所謂住宅工業であるからその家屋は純粋な住宅と見てよいのである。

都市は通例家屋と街路と空地との三つから成り立つて居る。街路には鋪裝された部分と土石道の部分とがある筈であるから、これを明瞭に圖上に表はさねばな

らぬ。出來得ればその鋪裝の種類をも明かにするとよい。又人道車道の區別ある部分、電車のある處と無い處、街路樹の有無、街路照明の有無等も圖示すべきである。

空地にも色々ある。單に建築の豫定地が一時空地として存在することもあれば、練兵場とか運動場とかの樣に或目的のために空地となつてゐる所もあるし、材木とか土管とか云つた樣なものゝ野積場となつてゐることもある。又公園や庭園の樣に草木を植えたり池沼を設けたりして、空氣を淨化し人目を樂ましめてゐる所もあつてこれを綠色地域と名づける。家はあつても空家であればそれは空地に類するものであり、倉庫も野積場と同じ意味のものであるから、共にこれを空地の中に入れてもよい。

都市の開拓景（廣島市南竹屋町の一部）



第十三圖　廣島市一部の開拓景

このあたりは大正の末年までは殆ど畑ばかりであつた所で、ほんの五六年間に急激に住宅地となつた所である。畑であつた時代に不規則な區劃であつたのを、改正することなく自然に任せた爲め、街路系統が極めて不規則になり、所々に袋小路なども出來てゐる。大正通は最も早く開けて今も交通が最も盛であるが、幅が狹くて辛ふじて自動車を通ずるに過ぎないし、これに次で出來た大正中通は自動車を通じない不便な通である。中央通は大正十四年に出來たもので、幅も四間乃至五間あつてバ

スの通路となり、將來本地區の中心街とならんとしてゐる。

中央通と大正通との兩側には店舗が多く、大部分は物品販賣業である。その他の街路には店舗は斷片的で連續してゐない。販賣業の外には湯屋・理髮店・飲食店等の接客業が散在し、その他の商業としてはタクシーがあるのみである。店頭工業としては仕立屋・表裝屋・看板屋・洗濯屋等があるが、公共建築としてはたゞ巡査派出所があるのみで、學校も無ければ公會堂もない。

大部分は住宅で、近頃は空家も少くないが月々に異同が甚しいから、こゝではこれを圖示しなかつた。空地は建築の豫定地が二三あるのみであるが、事實上自由空地となつて子供の遊戯場化してゐる。綠地として野菜畑や植樹地域があるが、これは古い畑地の殘存してゐるもので、早晩建築物を見るに至るであらうと思はれる。

破壞的利用

土地の破壞的利用とは、土地から何物かを採集搾取して、その後の補充を顧みないことを云ふのであつて、自然林の伐採や狩獵漁獲や、鑛物の採掘等は皆その

中に含まれる。それは極めて原始の時代に盛に行はれたものであるが、文化の進んだ土地に於ても依然として盛に、殊に組織的に大規模に行はれてゐる。

動植物に對する破壞的開發は極めて原始的なもので、今日のわが國ではほんの一部分を除けば殆ど行はれてゐないと云つてよい。何となれば破壞の結果としての缺乏が生民を苦めることが非常に明瞭であるために、山林を伐れば必ずその跡に植林してゐるし、鳥獸の如きは殆ど已に採るべきものが盡きたと云つてよく、魚類の如きも養殖放流が盛に行はれてゐるのである。併し鑛物のみは人力によつて補充するの道がないので、純然たる破壞的利用として盛に行はれてゐるのを見る。

鄕土に於て如何なる鑛物が採掘されてゐるかを見よ。都市で無い限りは屹度何程かの事實を見出し得るであらう。それは金屬鑛物であるか非金屬鑛物であるか、金屬鑛物ならば精錬は何處で行はれてゐるか、非金屬鑛物ならば土石類であるか、

石炭や石油の樣な有機鑛物であるか。それはどんな形で何處で利用せられてゐるか。

家の壁土は何處から採取されたか。道路を築造するために土砂や砂利の類は何處から取つて來られるか。低濕地や海岸などの埋立には何處の土砂が利用されたか。山の麓に行つて見ると、屹度土砂を掘り取つた跡があるものであり、海岸近くの廣い沖積平野では、所々に土を掘り取つた跡が水溜りとなつて殘つてゐるのを見ることが多い。これ等は凡て原形に復元して見て人類努力の跡を清算すべきである。

經濟形態

職業構成

國勢調査に職業別人口なるものがある。直接その業に從事してゐる本業者と、本業なき從屬者(即ち老人や子供)及家事使用人との二つに分け、職業を農・水産・鑛・工・商・交通・公務自由・其他有業者・家事使用人・無職業等に分類してある。この中公務自由業とある公務は官吏や公吏や教員などを指し、自由業とは醫師や辯護士などを指したのである。そこで鄕土の職業別人口を調べて、各業者の全體に對するパーセンテージを算出して見ると、大體その地が農村と云つてよいか漁村と稱すべきか、それとも商工業者を主とする都市であるか、即ち如何なる經濟形態を有するかを明かにすることが出來る。

國勢調査の外に職業戸口調といふものが毎年出來てゐる。これは農・水・鑛・工・商等に分つて本業とするものと兼業とするものとの戸數を調べてある。ところで本業と兼業との關係は極めて複雜であるから、表の上からはその眞相が判然しない。即ち例へば農を兼業とするものが若干戸あるとして、それは商家が農を兼ねてゐるのものが何戸で、漁業者の農を兼ねてゐるものが何戸といふ樣な、細かいことはわかり兼ねる。又農と商とを兼ねてるものに就て、その何れが本業で何れが兼業であるかの判然しないものもある筈で、それは當事者自身にも決定し兼ねる場合があるから、調査員の見込でどちらにでもなる性質のものである。

尙又春と秋には農業に從事し、夏と冬とは工場に通ふといふ樣なものをどの部類に入れたらよいか。家は農業が本業でも、主人は役場に出る公吏で細君は煙草屋を兼業とし、息子は海員となり娘は紡績工場に通つてゐるといふ場合、この一家を何業として計算すべきか頗る面倒になつて來る。そこで大體の標準は一家の

生計を支へる主なる職業、即ち簡單に云へば收入の最も多いものを本業とする外は無い。併し一家五人が農業に從事しても、その收入は一人の職工の收入の十分の一にも足らぬといふ樣なこともあるから、收入のみを標準とするよりも寧ろ勞力の分量を標準とする方が妥當なといふ場合もある。

戸口の職業構成はこれを五年又は十年前と比較して、その何れが增し何れが減るかと云ふことを見なければならぬ。それによつて鄕土の職業動向が知られる。農を捨てゝ商に走るものが多いか、工業から追はれて歸農するものが多いか。戸口そのものゝ實數の增減、全體に對する割合の增減、何れも有意義な數字である。

更に出來得れば鄕土の各部分について、各職業の割合なりその增減の模樣なりを比較して見るとよい。どの部落には漁業が多くどの部落には工業が多いか、どの部落は商業が增加し、どの部落は海運業が增加するか。それはその部落の位置が山間であるか海濱であるかといふ樣なこと、地形が傾斜地であるか平地であるか、交通線の狀態がどうかと云ふ樣な種々な環境の相違が原因してゐるであらう。例へば交通の幹線たる大道路が改修せられてその位置を變更すると、舊道路に沿ふて居た商店は閉鎖されて新道路の方に移ることがあり、新に鐵道が敷設せられて驛が設けられると、そこに新しい驛前聚落が生れて全村の職業分布に一大變化を起させるものである。

生産力

各市町村には年々生産統計といふものが出來てゐる。農産・畜産・蠶業・林産・水産・鑛産・工産に別つて一年間の生産高を計出したもので、これを戸數又は人口で割ると現住一戸平均又は一人平均の生産力も明かになる。又生産總額に對する各業生産高のパーセンテージを計出して見れば、大體その地の經濟形態が明かになるであらう。

ところでこゝに注意すべきことがある。職業構成と生産力の割合とは必ずしも一致しないことである。例へば廣島縣佐伯郡中村の戸數は五六一戸で、その中農業が四一三戸であるから全體の七四・八％を占め、工業は三二戸でその十分の一にも足らないが、生産力を見ると農産は僅かに十九萬五千圓で、工産はそれよりも多く二十二萬五千圓となつてゐる。即ち總生産高に對する工産の割合は四八・六％で、農産は四二％に過ぎないのである。これは何もこの村に限つたことでは無く、凡ての土地に共通の事實なのである。

元來農業・林業・水産業などの樣な自然を相手の産業と、工業の樣に人力を主とする産業とは根本的にその性質が違つてゐる。自然産業では一人が一ヶ年に數百圓の生産をなすことは殆ど不可能であるが、工業では場合によつては一人が一日に數百圓の生産をでもなし得る。併しそれだからと云つて、工業に從事する人の方が自然産業に從事するものゝ數百倍の仕事をして居るといふことにはならぬ。

何となれば自然産業の方は眞に自然の懷から何物かを掴み出すのであつて、その生産高は純粹の生産高であり、肥料などの樣に多少の代償的費用を要してゐるとしてもそれは僅少のものであるが、工業の生産はこれと異り、多量の原料に向つて加工するのであるから、その生産物の價格の中には原料費なるものが多分に含まれてゐることを考へねばならぬ。一人の時計師が百圓の時計を製造し、一人の女工が百圓の帶を織り上げたとしても、その中の何十圓かは原料代なのである。それを漁師の獲つた魚類の價格と比較するのは、生産高といふものゝ比較に於て根本を誤つてゐると云はねばならぬ。

併し現在に於ては一般にこの方法が無雜作に行はれてゐる。故に何處でも都會の生産力は田舍に數倍してゐる。廣島市の一人生産高は四七三圓であるが、工業の稍盛な同縣芦品郡は二一四圓、賀茂郡は一六五圓、而して純農村たる高田郡は一〇七圓山縣郡は一一三圓に過ぎない。而もこれを以て廣島市民の能率が高田郡

民に四倍してゐると見るのは不當であり、芦品郡の農産が三百萬圓で工業が九百萬圓であるからと云つて、この郡が工業を主とする郡だと見るのも當らない。(國定地理教科書の尋五用に、中國の山陽方面は工業が主業であると云つてゐるが、これは工産額が農産額より多いからそう云つたのであらうけれども、職業構成の上から見れば農が大多數を占めてゐるから、やはり農を主業と見るのが妥當であらうと思ふ)

尙今一つ注意すべきことは、官業生産は生産高の中に計上されてゐない。そのために吳市の生産高は一人平均一五九圓で廣島市の三分の一であり、安藝郡も亦一〇八圓といふ少額になつてゐるが、吳海軍工廠の生産高を計上したら、これは莫大な數字に上るであらう。

主要物産

鄉土の主要物産を列擧し、その各について詳しい調べをなせ。その物産は自家

用を主とするか販賣用を主とするか。その地に於て全然生産されるものか、それとも原料を他から取り寄せてゐるか。鄉土の全體から産するか局部的であるか、局部局であるならばそれには何か理由があるか。年中絶えず生産されるかそれとも季節的であるか、季節的であるならばそれは何故か。男の手で出來るか女の手で出來るか、それとも子供の手を借りてゐるか。本業的か副業的か。何人か卒先者があるか、指導奬勵の機關があるか。

何が主要物産であるかには二つの見方がある。鄉土に於て最も多額に産するもの、即ち全生産高中の第一位、第二位といふ樣なものを主要物産と見ることもとより當然であるが、今一つはその地に於ける生産としては二位三位に下つても、全國に於て第一位を占めるといふ樣なもの、つまりその地の特産物といふ樣なものを主要物産と見てもよい。尤も名もない樣な田舍のお土産煎餅の類は、全國の何處にも無いその村だけの特産であつても、これを主要物産とも云ひ兼ねるが、

相當に廣くその名を知られ、他地方に向つて賣り出される品であれば、たとひその村ばかりでなくて、附近の數町村乃至數十町村に共通のものでも、その地方に於ける特産物として大なる鄕土の誇となり得る筈である。

特産物の研究（廣島縣矢野町の髢）

享和年間に大阪屋吉兵衛といふものが商用で九州地方を旅行中、竹藪の中に捨てられてゐる婦人の拔毛を見て、何か利用の方法がありそうなものと考へ、遂に髢の製造を工夫するに至つたもので、これが油拔きの方法に最も苦心し、一種の生土を用ひることを考へ付いたのであるが、その適土がこの地にあることを發見したのが、この業のこゝに興つた最大原因である。而してこの町は現在戸數一二三〇、人口七二四〇の田舍町であるが、連檐家屋は極めて僅少で農を主業とする農村である。而も一戸平均の耕地面積が田は一段一六、畑は五反一七であり、山林も一段一二しか無いといふ狀態であるから、昔から耕地は缺乏して最も貧弱な農村であつた。隨つてその農業經營にも極めて集約的な方法が工夫せられてゐるが、尙過剩の勞力は何か他の方面に仕事を求めずには居られない狀態にある。これがこの地の髢業發達に大なる影響を及ぼ

したことは慥かである。

かくて逐年發展を遂げて來て、明治三十二年頃からは外國へも輸出する樣になり、大正元年には從業戸數八五、從業者三百五十人、製品八萬貫、その價格二十萬圓に達し、更に昭和三年には三百五十戸、六百五十人、二十五萬貫、百〇二萬圓に激增し、戸數に於て半數以上がこれに從事し、生産高に於て總生産額の七三%を占むるに至つた。

原料は凡て拔け毛で、始めは主として九州方面から得られたが、今は近畿以西の各地から集められる。附近の屑買ひの日々各戸から買ひ集めて來るものが約五十人ばかりもあり、各地の屑問屋から供給されるものも多い。上等品は主として九州、殊に熊本縣に多く、又福島・栃木の産は優良で殊に福島縣のものが最も强いといふことである。これはその地の氣候が住民の頭髮に影響してゐるのか、それとも何か人種的な關係でもあるのか明瞭でない。支那からも多量に輸入せられる。これは已に油を拔いて梳き揃へたものが輸入されるが、內地産のものよりも著しく太くて强剛である。又支那ではこの頭髮で厚い布を織つて大豆を搾る時の搾り袋に使用して居るので、その破れた廢物を大連方面で買ひ占めて輸入し、これをも原料に供してゐる。又最上等品としては西藏産のヤクの毛も輸入せられてゐるが、これは極めて少量である。

内地産の原料は多量の垢と油との附着した極めて不潔なものであるが、先づこれを特殊の土と混じて釜に入れて蒸すのであつて、これを油抜きと稱し、この土を髢土と名づけてゐる。髢土はこの村でも一二ケ所から出るのみであるが、それは全く花崗岩の風化土であつて、黄褐色の粘土狀を呈し極めて細微である。肉眼では石英の存在が不明であるが鏡下に檢すると石英と雲母とがあるから花崗岩であることがわかる。併し決して沖積土では無い。比較的粘土の部が多いので、これが油を吸收する性質を有するのであらうが、或小區域に限つてこの性質が强く、他から産するものは肉眼では何等の差の無いものでも油抜きに適しないといふことであるから、その微地質的現象については尙今後の研究に俟たねば明瞭にならない。

油抜きを終つた毛は長短混淆し且つ縺れてゐるから、これを梳いて選りわける。そして白髮や赤毛が交つてゐるから染色を施さねばならぬ。染料としては硫酸鐵・櫨、Black logwood のエキスなどが用ひられる。そして染め上げて乾して更に又梳き揃へて、束髢・髷形・臺・根駒・バラ天・イタゴ・タボ等から、傘の轆轤用の糸とか毛網とかいふ樣なものに製せられる。その工程は大部分手工によるもので機械を用ひることは極めて少いから、大工場といふものは殆どなく、概ね二三十人内外の職工を有するのみで、又部分的の工程は賃仕事として分業的に各戸に於て

行はれてゐる。職工は男女共にあり、老人子供に至るまでこれに從事する。職工の中には隣接の坂村や海田市町から來るものもあつて、冬の農閑期には特に增加するのが常である。

製品の販路は南日本一帶で、朝鮮・臺灣・滿洲にも及んでゐる。何處で何程販賣されて行くかは各製造家に於て公表を憚るので正確な調べが出來ない。從つて年産百萬圓といふのも極めて概算的な見込額である。而して原料の毛髮は平均一貫が二圓五十錢であるから、一ケ年の消費額二十五萬貫としてその價格六十二萬五千圓となり、製品は原料の十七割の價格となるのが普通とされてゐるので、それから計算すると百六萬二千五百圓となる勘定である。

そこで髢の生産高からその原料代と他村から來る職工の賃錢とを除いて、殘りの約四十萬圓といふものがこの町の純收入となるとすれば、他の生産高即ち農牧方面の米七萬六千圓、繭二萬七千圓、牛一萬七千圓、鷄卵一萬四千圓、麥一萬七千圓、蔬菜一萬二千圓を合計しても十六萬三千圓にしかならないのであるから、町民の生活が如何に髢に負ふ所の大であるかを推測することが出來る。即ち全國的に名聲の高いこの地の髢は、一面鄉土の最も重要なる産業となつてゐるのである。（主として矢野尋常小學校及び同校訓導木村一重氏の調査による）

農業

郷土が農村ならば農業について特に詳細に研究すべきであり、都市であつてもその周縁部には極めて、重要なる意義を有する農業の行はれてゐる場合が多いから、これ等についても調査を周密にしなければならぬ。農業について調査すべきことは土地、作物、勞力の三大要素と農業經營法とである。

土地の形態や土質・水等については已に開拓景の頃に述べたが、更にその土地が如何に利用せられてゐるか、即ち利用度について見なければならぬ。生物の自然生育に委してあるか、人力によつて培養管理を行つてゐるか。三年に一度耕作したり、數年耕作の後には十數年間放置したり、農耕と牧畜と交互に行つたり、種々の利用樣式があるであらう。若又毎年耕作してゐるならば、一毛作であるか、二毛作であるか、それとも三毛以上の多毛作が行はれてゐるか。或は果樹の樣な

永久的なものを植えてゐるか、その中間に年次的な作物の間作を行つてゐないか。集約的に利用してゐる部分と粗放的な部分とはどう分布してゐるか、それは地形の關係か地質の相違によるか、それとも都市への距離、又は農家と耕地との距離の關係によつて違ひはしないか。

肥料はどんなものが用ひられてゐるか。自給肥料かお金を出して買ひ入れる金肥か。金肥ならばその種類は何々か。如何なる時期にどんな作物に對してどの肥料が用ひられるか。地域によつて肥料の種類や分量が違ひはしないか。自給肥料の種類は何々か。堆肥の材料は何を主とするか、鷄糞・蠶糞等はどう利用されるか。綠肥が作られてゐるか。都市の附近では人糞尿をとるにどんな方法によつてゐるか、金なり米なりを出して買つてゐるか、それとも先方から金をとつてゐるか。

作物の種類は何々か、稻の裏作としては何を作るか、畑作物は何々か。それ等

はどんな季節に作るか、播種・移植・間引・草取・中打・施肥・手入れ・收穫・調製等の時期を明瞭にせよ。地形や土質や氣候の相違によつて作物の種類が違つてゐないか。日當りのよくない部分、雪や霜の少い部分、急斜面の段々畑、風當りの强い處、濕地、埋立地、新に開いた山畑等には夫々如何なる作物が仕付けられるか。

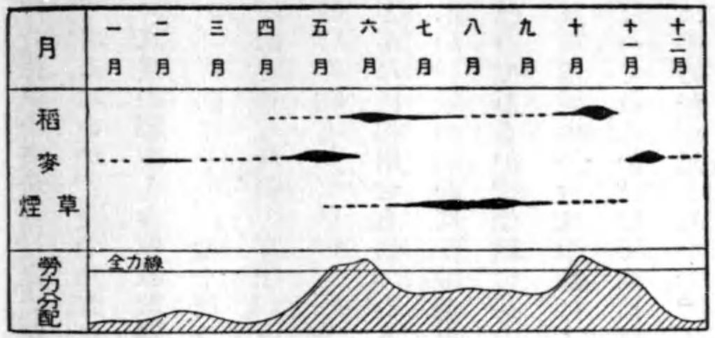
同一の地には年々同一の作物が作られるか、それとも年々違つてゐるか。稻と麥とは年々同一地に栽培してもよいが、その他の作物は概して厭地の現象があるから、年々作物を變更轉換して何年目かに循環する樣に工夫するのが常である。これを作物の輪轉(Crop Rotation)と名づける。鄉土に於て最も廣く行はれてゐる輪作の表を作れ。

早期栽培は行はれてゐないか。行はれてゐるならばその種類と時期、露地栽培が溫室栽培か、市場價値はどれ位い高いか、一年にどの位出來るか。何處へ送るか、何時間かゝるか、運賃がいくらであるか、どんな方法で賣つてゐるか。

何か特殊の栽培法は無いか、他の町村と共同出荷等を行つてゐるか、或は競爭してはゐないか。その地方にのみ作られる理由は主として何であると思ふか、地勢か氣候か都市との位置的關係か。昔はあつたが今は無くなつたといふ作物があるか。何故にそれは無くなつたのであるか。新しく始まつた作物は何故であるか、誰が主として最初の實驗者となり、指導者となり若くは奬勵の任に當つたか。

畦畔作物としては何が作られてゐるか。道路や鐵道の兩側、河川池塘の堤防等はどんなに利用せられてゐるか。宅地の周圍には何が多いか、果樹か竹林か又は雜木か。家の前庭は收穫期以外には空地として遊ばせてゐるか、それとも野菜等を作つてゐるか。生垣に茶の樣な有用作物が利用せられてゐないか。

農業所要の勞力は季節によつて變動が甚しいものである。その分配の狀況はどうなつてゐるか。農繁期は何時頃から始まり、農閑期は何時頃であるか。農繁期には勞力が不足しないか、不足するとせばそれは村内で補つてゐるか、それとも



第十四圖　農業勞力分配の一例(廣島縣南部地方)

他の地方から補つてゐるか。他から補充するとせばそれは何處からどんな人たちがどういふ契約樣式で入り込んで來るか。又農閑期の過剩勞力はどう所置されてゐるか。村内に於て他の仕事に從事するか、或は他の地方へ出稼するか、それは何處へどんな仕事に出て行くか。

牛馬の勞力は如何に利用されてゐるか。鄕土に於ける耕作用牛馬の頭數、その一年間の勞働日數を調べよ、通例何時頃何歲位の牛馬を買ひ入れ、何時頃これを賣り又は若い牛と交換するか。その飼料は主に何であるか。農閑期には全く遊ばせて居るか、或は他の役用に供せられて

ゐるか。農具はどんなものが用ひられるか。昔からどう變化して來たか、どんな動力機械が用ひられてゐるか。

農業經營の方法はどうか。自作・小作・自作兼小作は各何戸あるか、どれが增加しどれが減少するか。又田畑の面積から云へば自作面積と小作面積とはどんな割合になつてゐるか。一戸平均の所有反別と耕作反別とを計出比較して見よ。何程の田畑を所有することが理想的か、又は生活平均線上であるか。

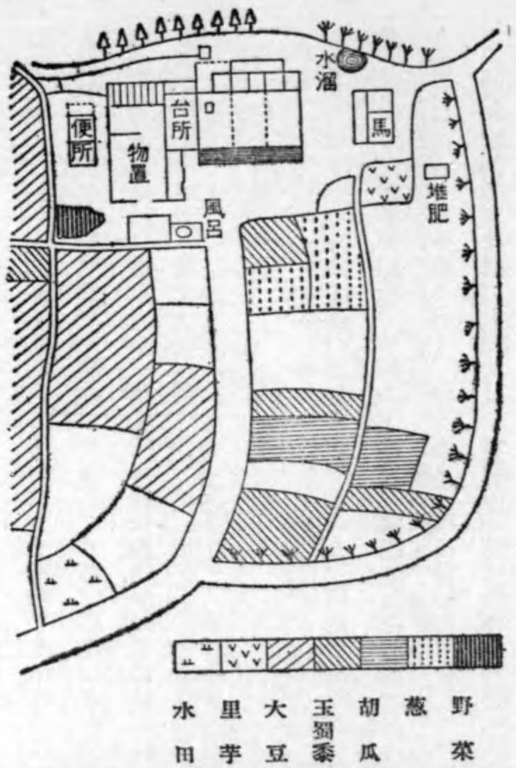
地主の數とその所有面積とを調べよ。一町以上、三町以上、五町以上、十町以上等に分つてその戸數を表記せよ。それ等の地主は何れも鄕土の人であるか、或は他町村の人であるか。鄕土に住居してゐた地主が他へ轉居したものがありはしないか。地主は全く無職業であるか、又は他に何かの職業を有するか。地主が多數の勞働者を雇傭して自營農業を行つてゐるものは無いか。小地主の共同耕作等の事實があればその内容について充分詳しく調べるがよい。

小作の狀況も調べねばならぬ。小作料は何程でどんな方法で納めることになつてゐるか。地域によつて小作料の高下は無いか。未納者が多くは無いか。小作爭議が起つたか、その原因、結果はどうであつたか。

副業としては何が行はれてゐるか。養蠶・養鷄・養豚の類か、手工業的のものか。その戸數は全戸數の何割に當るか。その數量、生產高、販賣の方法等。手工業ならば主に家族内の誰が從事するか。原料は他から供給せられるかそれとも農業の副產物を利用するのか。全くの自營か又は受負組織か。生產の全課程を行ふのか或は部分的の仕事をするのか。問屋は何處にあり、資本主は何處の者で製品は何處に賣れて利益は何程あるか。それは何時から始まつたか、昔はあつたが今は廢れたといふ副業があるか。何が故に廢れたか、他地方との競爭に敗れたものとすればその原因は何處にあるか。凡てこれ等のことは出來るだけ詳しく調査しなければならぬ。

新開地の一軒家（岩手縣江刺郡歌讀部落）

岩谷堂町から約三十分ばかりで行かれるこの家は、洪積層の臺地の南向の傾斜地、僅かばかりの水田を挾んでゐる處に立てられてある。十一年前（大正八年）にこゝの開墾のために移つて來たが、五町歩の中で田が四反歩の外は山林であつた。しかし今は開墾した畑が五反歩ある。十一月に小屋を建てゝ鍬入れをなし、翌春になつて新に



第十五圖 一軒家の農業經營（小田内氏による）

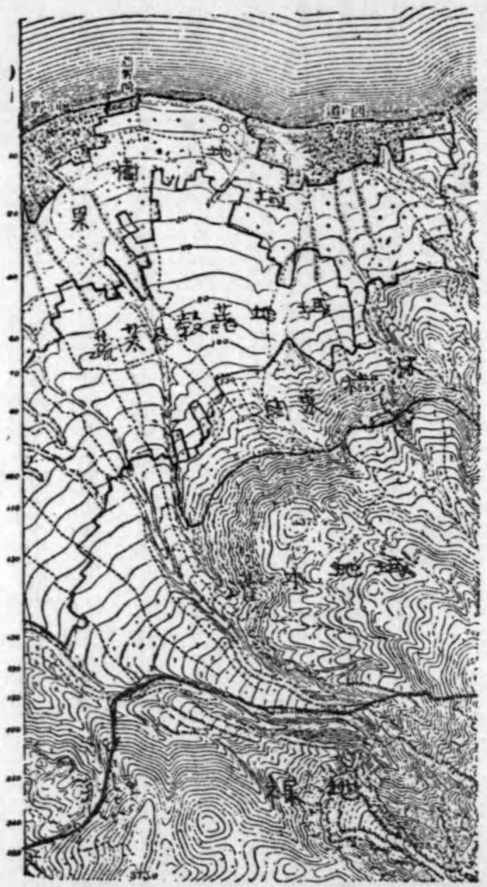
家を建てた。田は四反畑は五反自作する外、田は五反歩小作してゐる。岩谷堂町に賣出すものは薪と野菜、岩谷堂町から買入れるものは魚や砂糖や其の他の日用品。家族は十一人で、内二人は隣に分家して同じ耕地の勞働に從事してゐる。精農な事は、蔬菜畑の手入や風呂場の薪入の整つてゐるのに窺はれるが、集約的な經營振はすべてに見られた。（小田内通敏氏「鄉土地理研究」より）

櫻島の農業形態

海岸には一定の地區を限つて肥料溜が並列し、鹿兒島市内より運搬せられた糞尿は此處に貯藏せられる。聚落の周緣、傾斜の下部耕地は直ちに果樹地域となつてゐるが、小蜜柑は幹の廻り數尺に達する老木頗る多く、最も舊き耕地に分布せるを見る。溫州蜜柑は未だ若木多く、主として小蜜柑や夏蜜柑の上緣地域や新開の耕地に分布し、枇杷は柑橘園の周邊や聚落の周圍道路の兩側に繁茂し老木多く園となれるものは少い。

蔬菜類は果樹園の間作か或は果樹地域より更に上部の耕地に於て作られ、陸稻・粟・麥・甘藷等の集約度低き作物は蔬菜との輪作として……例へば西瓜→大根→甘藷→麥→南瓜→大根→西

瓜……又は蔬菜地域より更に上部の山林に近き耕地に於て生産せられてゐる。耕地が盡きると急に傾斜が強くなり、山林地域に入る。


樹
果
蔬菜
穀菽
桑
桑
桑

(一) 海岸……肥料溜
(二) 聚落
(三) 古き果樹地域……亂雜なる經營、批肥・小蜜柑の老木、夏蜜柑類
(四) 組織立つた果樹地域……批肥・李・溫州蜜柑
(五) 若き果樹園と蔬菜の混淆地域
(六) 穀菽地域
(七) 山林地域

かく標高僅か三百米の間に耕地利用の著しい變化があつて、低地の聚落から奪取的な果樹地域となり、高度を増すに從ひ漸次集約度を減じて穀菽地域となる。(「鄉土科學」第八號所載、石橋幸雄氏「火山山麓地域としての櫻島の農業」より)

工業

工業は近代都市の一大特色であるが、田舍に於ても極めて程度の低い工業は屹度行はれてゐる。例へば大工・佐官・鍛冶屋・屋根葺職・石工の如きはそれである。

これ等を專業とするものが幾人居るか、それは何れもその土地の人か又は他から移住して來たものか。それ等は昔と比べて增したか減つたか、その理由等について研究すべきである。

工業の中主として客の注文に應じて行ふものがある。時計や自轉車の修繕、金銀細工・洗濯・染物・裁縫・編物・刺繍、提燈・傘等の製造、活版・石版印刷業・寫眞業・建具・家具・指物業・疊製造・菓子製造・餅屋・豆腐屋の類は概ねこれである。これ等は大都市にあつても通例小規模に多くは店頭に於て行はれてゐるのでこれを店頭工業と名づける。これ等が如何に分布してゐるかは極めて重要な問題である。

次に家庭工業又は家內工業と名づくべきものは、都市では住宅區域や細民區域に盛に行はれ、田舍でも交通の便利な、家の澤山ある地方では多く行はれてゐる。眞田組み、網すき、蓆細工・織物の如きその一例である。農家の副業として行はれ、都會では婦人子供の間暇利用として行はれる。又中にはこれを專業とする細

民もある。その原料の種類、出所、工程の大要、製品の販路等について研究すべきことは多い。

大工業は都市の周縁若くは近郊に存在するのが普通であるが、時としては田舍に於ても大工場の設置を見ることがある。それは交通の便利なためか、地價の低いためか、或は重量原料品、例へば土石類等の產地であるか、何等かの理由があるから、工場設置當時の事情を調べて見なければならぬ。そして設置後事情に變化を來しても、工場の移轉は容易に行はれないものであるから、不便を忍んでこれを繼續するといふ樣な例がある。例へば富士山麓の製紙業の如き、水の便利といふことの外に山麓地帶の木材がその原料となつてゐたのであるが、今ではその原料は皆無となつたので、北海道などから木材をとり寄せ、清水港に陸揚げしてから更に汽車によつて輸送してゐる。若し最初に原料がこの地方に無かつたならば、工場の位置はもつと海岸に近い處に設けられてゐたかも知れない。その當時

の事情を知らないでは一寸解釋し難い現象である。

原料・動力・勞力・資本・土地・技術・市場の七は工業の要素である。各工場についてこれ等の要素に關し詳細に調べねばならぬ。原料は何處からどういふ經路を通つて送られて來るか。原料の價格と運賃との割合はどうか。原料の買入には季節的の關係があるか。動力の種類は何か。石炭や石油を用ひるかそれとも電氣か。石炭・石油ならば何處の產でどういふ風に運んで來られるか。電氣は火力か水力か、何處に發電してどう送つて來るか。一ヶ年間の動力使用高は何程で、それは季節によつてどう變化があるか。

勞働者は男女各何名を使つてゐるか、その年齡別は如何、出身地は何處か、通勤と寄宿との割合、通勤者は徒步か電車か。賃金は平均何程か。女子の勞働者には既婚と未婚と何程づゝであるか。寄宿舍があらばその組織はどうか、姙婦に對する休養はどうなつてゐるか。少年勞働者が居るか。

工場衛生の狀況はどうか。疾病・負傷・死亡の狀況、それはその地方の一般狀況とどう違つてゐるか、工場監督官又は保險醫等について意見を求めよ。

失業の狀態はどうか。都市の勞働者が失業して歸農したものは、他に仕事が無いから已むなく農業を手傳つてゐるが、かゝるものは失業調査にあたつては、失業の中に計上されぬことになつてゐるから、統計の上では田舍には失業者が極めて少い樣であるが、たとひ農業を手傳つてゐるにしても、それは農村に於て過剩の勞力であること明瞭であるから、必要あつて呼び戻したものは格別として、所謂歸農者は凡て失業と認むべきである。よつてこの眞の失業者の數を各戸について調査集計して見るがよい。その數の全人口に對する割合は決して少くないであらう。

技術については技師の出身地は何處か、外人技師が居るか、何か特許權をもつてゐるかといふ樣なこと、資本に就いては主な資本主は何處の人かといふことを

調べる必要がある。技術や資本を多く他から輸入してゐるといふことは、鄉土の工業としては決して喜ばしいことでは無い。それと同時に一面鄉土の資本や技術が他地方に出てゐるものが何程あるかといふことも調べて見るがよい。或特殊の技術者を多數輩出してゐるといふ樣な例も時々聞くことである。

市場とは製品が何處に賣れるかといふことである。その賣れる範圍、取引の組織、輸送の方法等について詳しく調べて見ると、色々面白い事實を見出すことがある。大阪で出來る貝細工の小さい玩具が、伊勢の二見に行つては二見名產となり、九州の青島に行つては青島名產となつて、再び大阪や京都の人たちに買はれて行くといふ樣なこともあり、米澤で織られた織物が京都に行つて、西陣織の銘うつて再び奥羽へ下つて行くといふ樣に、その最終の消費者の手に入るまでには、意外の經路を辿ることの多いものである。

工場の位置選定について（日本製鋼所）

株式會社日本製鋼所は製鋼及び兵器製造を目的とし、資本金一千萬圓を以て明治四十年に創立せられたもので、大正八年には北海道製鐵會社を合併し、翌九年には廣島製作所を買收し、今や室蘭・輪西・廣島の三工場を有する資本金三千萬圓の會社となつてゐる。

その最初に工場を設けるにあたつて、室蘭と廣島縣の糸崎とが有力な候補地となつた。糸崎は內海に臨む安全な港を有し、海は海岸から急に深くなつてゐて、大艦巨船を近づけるに便であり、石炭は九州から安價にとり寄せることが出來、又呉の軍港も近いから何角と便利であるといふ樣な理由をもつてゐた。ところが室蘭の方は後方に石炭の產地を控へてゐるし、又輪西には已に炭坑會社經營の製鐵所があつたから、その製品を原料として使用するにも便であり、一方軍港の豫定地にもなつてゐるのでこの方がよからうといふことになつた。殊に呉には立派な海軍工廠があるから、兵器の製造所は集結するよりも分散する方がよいといふ見地から、糸崎よりも室蘭を主張する方が有力となり、遂にこの方に決定したのである。

併し現時では兵器工場の分散といふことはあまり有意義で無いといふことになつた。そこで

廣島製作所を買收してこゝに工場を持つことゝなつた。そして今や輪西工場も分離獨立せしめることとなり、室蘭工場では主として粗材を製作し、これを廣島工場に持ち來つて仕上・組立等の精密加工を行ひ、製品は悉く呉工廠に納入するといふことにしてゐる。廣島工場は市を離れた山蔭にあり、海に臨んで交通の便利もよく、大都市を控へて職工の雇入にも好都合なのである。動力は凡て電氣を用ひてゐるから石炭の必要は無い。

漁業

漁場は何處か、川か湖沼か近海か遠洋か。その廣さ、出漁の最大距離、他町村との間の境界はどうなつてゐるか。深さは何程で底質はどうか、潮の干滿、水質など凡て漁場に關することを詳しく調べよ。

漁船は何艘あるか、和船か動力船か。その置き場は何處か、船を濱に引き上げて置くのかそれとも港に繫いで置くのか。船の溜や魚の揚げ場としてどんな設備がしてあるか。漁港としての長所・短所、どこをどうすればもつと便利になるか、

どんなことが漁夫の希望する處であるか。漁具は何々か、昔からどう變遷して來たか。

どんな魚類がとれるか。場所によつて魚類に相違があり、又季節によつても違ふ筈であるから、魚類の空間的及び季節的の分布を明かにし地圖又は圖表に示せ。出來得れば季節による魚類廻遊の經路を描け。又稚魚の放流等增殖の手段が講せられてゐるか。養殖業はどうか、行はれてゐるならばそれについて詳細に調べるがよい。

漁獲物はどこへどう賣れて行くか。輸送の時期・時刻・方向・經路等を調べよ。又水產製造が行はれてゐるならばそれについても調べねばならぬ。漁獲者と販賣者又は製造者は同一人のこともあれば別人のこともある。それ等の商習慣等についても研究すべきことは多い。又漁獲にも網元・船主・船夫等の組織があり、その間の利益分配の方法等もそれ〳〵の地方に特色を有するものである。沖繩縣の糸滿では夫が船に乘つて獲つた魚は、妻がこれを買ひ受けて町に賣りに行く。そしてその利益は妻の所得となり、全く夫婦別途の經濟を有する習慣があるといふ。相模灣沿岸では地曳網の獲物は凡て別個の商人が濱から擔いで賣りに行くが、瀨戸內海の沿岸には雜魚の販賣は凡て女子に限られてゐる所が多い。併し大きい魚は多くの場合市場に於て取引が行はれる。

商業

都會は勿論であるが田舍にも多少の商店が無いことは無い。小さい雜貨店、菓子屋・煙草屋の類で、それは或は農業の片手間に行はれ、或は專業となつてゐる。それ等について主な品物の仕入先、その輸送の經路方法、賣れ行く範圍即ち商圈、一日の賣れ高、忙しい刻限、季節による賣高の相違、現金買が多いか通帳買が多いか、勘定日は何時かといふ樣なことに就て調査せねばならぬ。又鄕土の必要品

で他町村から買はねばならぬものは何々か、何處へ買ひに行くか、何時頃に多いか。更に他町村から行商人の入り込むものは無いか。

都會地に於ては各種雜多の商業が盛に行はれてゐる。それ等は一面には著しく分業化してゐるが、又一面には百貨店の樣な綜合されたものも行はれてゐる。これ等を適當に分類して地圖に色別けにして記入すると面白い。これは前章開拓景の處でも一言したが、こゝでは特に都會の商業地域について述べるのである。分類の仕方は大體次の樣にすればよからうと思ふ。

物品販賣業
- 百貨店・各種物品販賣業
- 飲食料品販賣業（穀類・蔬菜・豆腐・乾物・魚介・鳥獸肉・酒類・調味料・清凉飲料水菓子・茶・其他）
- 建築材料及家具類販賣業（木材・竹材・石材・煉瓦・瓦・土管・セメント・土石類・建具・家具・指物・疊表・莚・荒物・陶磁器・硝子器・金屬器・皮革製品・度量衡・機械類・時計・車輛・農具・漁具等）
- 服裝品類販賣業（織物・呉服・洋服・綿・糸・編物・履物・雨具・夜具等）
- 消耗品類販賣業（肥料・燃料・紙類・紙製品・文房具・玩具・遊戯品・小間物類・化粧品・藥品・染料等）
- 其他の販賣業（出版物販賣業・古物販賣業・貿易業等）

媒介周旋業（取引所・賣買媒介業・口入業・賃貸業・預り業等）
金融保險業（銀行・信託・質屋・貸金業・保險業等）
娯樂・興業に關する業（活動寫眞・演劇・演藝等の興行、遊戯場・娯樂場の經營等）
接客業（旅館・下宿・料理店・飲食店・貸席・置屋・理髪・理容・浴場等）
交通業（自動車業・人力車業・車馬運輸業・運送店・回漕店・航空業・ラヂオ業等）

これ等の中特に同種の商業の集合した處は無いか、あらばその發達の歴史を調べて見よ。近世の城下町に於ては或地域を限つて或商業に特權を與へ、保護を與へた所があるから、その影響が今日どれだけ殘つて居るかも興味ある問題である。又米屋町・呉服町・材木町などの樣な町名のみは傳はつて、その商店は今悉く移轉

分散してゐるといふ樣な場合があつたならば、それは位置がわるかつたのか、商業の性質によるのか、それとも何か環境の變化があつたかといふ樣なことも研究の價値がある。

販賣業についてはそれ等の商品の仕入先は何處か、どういふ經路によつて取寄せるか、販路はどうか、居賣りか御用聞きを出すか、小賣りか卸賣を主とするか等のことから、賣れる時刻や季節のことなど、又販賣以外の各種商業についてもその忙がしい時期は何時であるかといふ樣なことを調べるがよい。旅館ならばどんな種類の客で何時頃多いかといふ樣なことが必要である。

市がたつか、緣日があるか、一ヶ月のうち幾日か、それが地方的にどう循環してゐるかといふ樣なこと。それは都會のみでなく田舍でも牛市・馬市は勿論各種商品の市のたつ處がある。そこではその市のたつ場所の位置から構造、集る人の範圍、それは商人のみか或は農民が自己の生產品を持寄るのでは無いか、どんな

ものが主に出るか、どれ位の取引があるか、昔と現在との盛衰の狀況等について調べなくてはならぬ。

木炭商

これは秋田縣旭川村の一小學兒童が自分の家について調べたものである。田一氏「鄕土地理書の實例とその取扱」より)

一　商品の產地は旭川村の仁別・藤倉、太平村、河邊郡・由利郡・仙北郡、青森縣・岩手縣・北海道其の他。

二　旭川や太平からは生產者直接に持つて來る。河邊・由利・仙北は船人が生產者から買集めて市內馬口勞町川端へ着する。そこから買求めて各地へうんばんする。青森・岩手・北海道は或人が生產者から買ひ集めて鐵道でもつて各地へ運搬する。そして停車場から或人が買ふのでその人が馬車や自動車にかけて我が家まで運んで來るのである。經費はどちらも一俵につき七八錢位である。

三　一日の總賣高は三十俵以上、ちんせんは一俵につき五錢から十錢までゝある。

四　冬は需要の時期だから大分多く販賣が出來る。一番いそがしいのは午前中である。

五　現金が半分、かけ賣が半分位。

六　家で木炭の商賣を始めてからもう三十年位にもなる。

生活態様

衣食住

衣食住は人間生活の第一次的なものである。それがどの様な形式で行はれてゐるかといふことは、もとより長い間の歴史の影響でもあるが、一面にはその地の自然的環境から制約せられてゐることも多い。それは狹い郷土のみを見て居たのでは明かにすることが困難であるが、他の地方と比較すると次第に明瞭になつて行くものである。そこでその地方にのみ行はれてゐる樣な特殊の形態に關しては、殊に精細な研究が望ましい。

衣服については先づその材料を見よ。それは何處から取り寄せられたものであるか。今から數十年前の頃には、田舍の人は多く手織木綿の着物を着て居たもの

で、綿も自ら作り糸も紡いだものが多かつたが、今では朝鮮の一部を除いては、衣服材料の自給をやつて居る農家は殆ど無くなつた。然らばそれは何時頃からそうなつたか、その變遷の跡を辿つて見る必要がある。

衣服の形式にしても同樣である。昔と今とでは餘程の違ひがある。子共の服裝が變り、勞働者の服裝が變り、最後に女や老人の服裝も變つた。袂が無くなつて筒袖となり、股引はズボン下となり、褌は猿股となり、頰かむりは帽子に、草鞋はゴム靴に、法被はスエーターに、近年の變遷は殊に目まぐるしい程である。それは或は生活樣式が變つたためであつたり、生活程度が高まつたためであつたり、西洋風が入つて來たためであつたり、色々の原因もあることであるが、併しその變遷の中に一脈不變の或ものがありはしないか。若しそれを見つけることが出來たら、それこそはその地の自然の制約ではないかと考へて見る必要がある。何となれば人事は如何に變遷しても、自然といふものは容易に變化するものでは無い

からである。

これはひとり衣服についてのみではない。食物や住居についても同樣である。寒い國と暖かい國、山國と海邊、雪の多い國と雨の多い地方、皆その自然の狀態に適應した或種の樣式といふものがある。その適應の仕方も色々變化する場合はあるが、そこには動かぬ或中心點なるものが見出される筈である。例へば藁靴がスキーに變つても、積雪の上を歩きよくするといふ趣意には變化がない。

又凡てが著しく變化した中にも、たゞ一つ容易に變らないで昔のまゝに殘つてゐるといふ樣なものも、その地の自然と關係の深いものであつて、多くはその地方の一特色となつてゐるのである。中部以北の寒い地方に廣く行はれるモッペ（又はタッツケ）と稱する衣服の如きもその一例である。朝鮮人の服裝にズボンの裾を括ること、綿入の足袋などがあるが、これは朝鮮の氣候に適應して出來てゐるものであるから、容易にその風が廢らない。ところが內地に住んでゐる鮮人の服

裝を見ると、勞働者には洋服が多く子供には和服も少くない。そして婦人の服裝は容易に變化しないで多くは依然たる鮮服であるが、それでもズボンを短くし足袋を穿かないといふ樣に、暖地に適した服裝に變更されつゝあるのを見ることが出來る。

食物についても同樣である。先づその材料は何か、主食物は、副食物は、それが昔とどう變つて來てゐるか。食器はどんなものが用ひられてゐるか。調理の方法はどうか。砂糖の消費量はどう變化して來たか。肉類の需要はどうか。一日何食であるか。それは季節によつて變化があるか。或地方では春の彼岸から秋の彼岸までは一日四食、その他は三食となつてゐるし、また或地方では田植時のみ一日五食となつてゐる。東京地方にはお八つの習慣があり、所によつては又夜食の習慣を存することもある。晝食をどうするか、耕地が遠いと食事小屋を作ることがあり、都會でも辨當を持つて行く處と仕出し辨當をとる所とがある。簡易食堂

の繁昌する地方、うどんやパンの多く用ひられる處もある。朝は必ず粥を食する地方、味噌汁と海苔が無くては承知せぬ地方、夕食に味噌汁を用ひる地方など樣々の習慣が各地方に行はれる。鮨の作り方でも關東と關西では大差がある。又地方特有の食品(蝗とか蝸牛とか)を調べよ。

酒についても土地々々の風がある。非常に多く飲む處もあればあまり飲まない地方もある。九州の南部では燒酌が盛に用ひられるし、婦人にも飲酒家が少くない。又酒宴は如何なる場合に行はれるか。或地方では田植とか麥播の後に酒宴を催し、或地方では葬式の時に暴飲する習慣がある。酒宴に必ず藝者を入れねば承知せぬ地方もあり、始めから太鼓をたゝいて騷ぐ地方もある。鄕土の人にはそれが當然のことの樣に思はれても、他地方の人から見れば極めて特異な事實である場合が少くない。

住居については前章「家の地理」に於て已に述べたが、鄕土に於ける標式的な

家の間取り、構造等について調べ、それがどう變遷して來たか、將來どう變化すべきかを明かにすべきである。家は一度建てたら數十百年動かぬものであるから、衣服や食物の樣な急激な變遷は無い。その代り新しく建つ家は少しづゝ改善せられて行くので、村全體を見渡すと數十百年間の變遷が展開されてゐて面白い。この點から云ふと衣服や食物は古いものが廢れて目に見えなくなるから、文書にでも書き留めて置かないと昔のことは煙滅してしまふおそれがある。

水と燃料

飲料水は何處から得てゐるか。それは飲料として適當であるか不適當であるか。硬水か軟水か、鐵分や有機物を含んでゐないか、鹽分はどうか。雨天に際して混濁しないか、旱天には干上ることは無いか。山村では竹管で泉の水を導いて來て、家の軒端で桶に溢れさせてゐるといふ樣な景觀が見られ、海岸の干拓地等では井

戸水のよいのが得られないために河水を飲用する處も多い。かゝる處では多く濾水として用ひてゐるが、その濾過裝置はどうなつてゐるかを調べよ。又井戸の構造を調べよ、それは單に石で築き上げたものか、それとも土管や桶を埋めてあるか。砂丘地等では砂が軟かいので桶を埋めるが、水は常に微細な砂で濁つてゐるといふ樣なことがある。又別府附近の樣に溫泉を飲用してゐる所もあるが、凡てこれ等特殊の飲料水の狀態が、住民の體質や健康の上にどう響いてゐるかといふ樣なことは、極めて興味深い研究問題であらう。

都會地では多く上水道が設けられてゐるが、その水源は何處か、どういふ設備で淨化してゐるか。一人一日平均の消費量、その季節的の變化等について調査せよ。又全戸口數に對する給水戸口數の割合、水道外の水を飲用する戸口數、その分布等についても調べる必要がある。これは或程度迄は上水道事務所について聞けばわかる。又都市の一部分、若くは小都市の場合には、各戸について給水栓の

數を調べこれを地圖に示すのも面白い。配水管の分布についても同樣である。

燃料は主として何が用ひられるか。薪か石炭か、薪はどんな種類のもので何處から得られ、石炭はどんな性質のものを何處から取り寄せてゐるか。木炭や煉炭の消費量、その取寄先等についても調べよ。福岡縣には籾殼を燃料とする地方があり、朝鮮では黍殼や草が燃料となつてゐる。その地方の環境によつては特殊の燃料もあるであらう。それ等は他地方と比較して特に注意する必要がある。

都會では薪炭の外にガスも用ひられ、又燃料の代りに電熱も使用せられる。そこで住宅地域などでは、各戸について炊事の熱は何によるか、風呂の湯沸し燃料は何を用ふるか等を調べて集計するがよい。

暖房の方法について調べよ。炬燵か火鉢か、圍爐かストーブか。寒い山村には圍爐が盛んに用ひられるが、これはアイヌの風とよく似てゐる。又炬燵は內地獨特のものであるが、地方によつてその使用する程度に相違がある。一戸平均何個

を有するか、毎年何時頃に開くかといふ樣なことを調べよ。又ストーブがどの位用ひられてゐるか。それは石炭を燃料とするか或は薪を用ひるか、電氣ストーブや瓦斯ストーブはどうか。小學校に於ては大火鉢を用ふるかストーブを焚くか、それとも暖房の方法をとらないか。

照明の方法はどうか。行燈を用ひ種油や石油をともすといふ樣なことは、殆どその跡を絕つた樣であるが、併し電燈の全然無い村もまだ少くないし、電燈はあつてもランプの併用されてゐる村も多い。かゝる村では電燈とランプの分布圖を作れ。都會では瓦斯燈も多少用ひられてゐるが多くは電燈の樣である。そこでその燈數とか燭光數とかを各戸について調べて、圖上にその多少を濃淡の色をもつて示せ。商業地域と住宅地域、高級地帶と不良地區とによつて著しい相違が見られる筈である。

室外照明については軒燈の數を調べよ。又大都市では街路照明も行き亘つてゐ

るであらうから、その部位を圖上に記入せよ。農村でも所々に街燈の點ぜられてゐる所がある。又神社佛閣等の獻燈にも常夜燈があるであらう。更に室外の歩行、作業等に使用せられる特殊の照明法を調べよ。地方によつて肥え松、煙草殼、麥稈や竹の炬火などが用ひられる。又提燈には蠟燭が用ひられるが、その蠟燭の種類はどうか。木蠟の産地には木蠟の蠟燭が用ひられるといふ樣な特殊な事例を見出せ。自轉車の照明には主として何が用ひられ、漁夫の魚をとる火は主として何が材料となつてゐるか。

道具

道具には色々ある。炊事道具・食器類は勿論、米を搗くにどんな臼を用ひるか、雨を防ぐにどんな雨具を用ひるかなど、何れもその地方に特有のものがあり勝である。これ等凡て家の中にある道具について成るべく一々スケッチをとつて置き

たい。糸車や舊式の地機などは今は殆ど見ることが出來なくなつたが、舊家の庫の二階などには塵にまみれて尙その殘骸を止めてゐるであらう。農家では農具、漁師の家では漁具、その他凡て職業に用ふる道具も同樣である。兒童をしてこれ等を記錄せしめ、木製か金屬製かゴム製かといふ樣に材料で分類したり、用途で分類したり又は動力を用ひるか否か、運轉する道具か固定した道具かといふ樣に分けたり、若くは買入れたものか自家の手製かといふ風にも分類して見るがよい。その道具の樣式がどう變化し發達して行くかといふことも、亦長期間に亘つて觀察すべきことであらう。

風俗習慣

鄕土に行はれる各種の風俗習慣を調査記錄しなければならぬ。それには先づ年中行事を見よ。一月から十二月までの間にどんな行事があるか。正月の遊び、左

義長、七草粥などの風習、涅槃會とか釋迦降誕祭の樣な佛教關係の行事、氏神祭その他各神社の祭禮とこれに伴ふ行事、植付・收穫等に伴つて行はれる農事祭の類、井戸浚へ煤拂ひ、盆會の行事に盆踊の模樣、三月や五月の節供、七夕祭、月見、菊祭り、新しい風習としては青年團や在郷軍人によつて行はれる消防演習とか射擊會とかいふ樣なもの、各種のスポーツ大會などもあらう。古いものは廢れて新しいものと代り、又形のみが傳はつて精神が變つて來たり、名前のみが傳はつて樣式がすつかり違つて來たり、これを歷史的に見ても色々の興味ある事實があらう。そしてこれを隣村や遠隔の各地と比較して見ると、その地方に於ける特殊の狀態もわかり、それが何に起因するかについても得る處が無いとは云へぬ。

次には人一代の行事を見よ。冠婚葬祭・新築・移住・開業・轉居・入退營・病氣全快等についての儀禮はどうか。出產についてどんな風習があるか、嬰兒に何か特別なものを飲ませるか、胎衣をどう所置するか。產婦の食事について特別の習慣は

無いか。出產後何日目かに特別の行事は無いか。命名はどんな樣式で行はれるか。五歲の時に男兒には袴着などの儀式を行ふ地方もあるし、成年になつた時は昔の元服の式の殘つてゐる地方もある。四十二歲とか六十一歲とかを祝したり、七十七、八十八の祝ひの式など、皆地方々々に違つた風習があらう。

結婚についても亦同樣で、婚約の仕方、結婚式の模樣など、時世と共に變化もするが昔ながらの儀式が尙多分に殘存するものである。又結婚については特にその結婚域なるものについて調べて見たい。交通の不便な地方では結婚の相手は概ね自村內で物色されるが、交通が開けるにつれてその區域は擴がつて行く。そしてたとひ郡を異にし縣を異にしても、一つの河系とか谷筋とかいふ樣な地形的・交通的の原因があると、政治區劃を超越して結婚域は廣がつて行くものであり、隨つて交通系統の變化は結婚域の變化を來すともあり得る。片岡氏によれば秋田縣の或山村では、鐵道開通以前の三十餘年前までは、山を越えて數里の所にある

或町と取引をなし交通をなして居た。その結果は結婚はその町又はその町に至る沿道の村邑との間に行はれ、言語・諸行事の服裝等もその系統の地方に著しく化せられて居た。然るに三十年この方鐵道の開通に依つて、その山村の民は方面を轉じて他の方面と交通する樣になり、從つて結婚も多くこの系統の村邑との間に行はれる樣になり、社交的事情は更にこの系統の村邑に化せらるゝやうになつたといふ。(「エデュケーショナルクオーターリー」第四輯所載、片岡重助氏「鄉土教育の修正」參照)

結婚域の變化といふことは實に興味深い事象である。

結婚域は又一面に於ては同一鄉土內に於ても障壁の設けられてゐる場合がある、農村と漁村との合一した村などにあつて、農家と漁家との間には決して通婚しないといふ例は少くない。一般社交的には何等の差別がなくても、結婚だけしないといふのは古い習慣の殘存であつて、家柄とか門閥とかいふことを極度に重く見るために起るのであらう。

更に死亡についてはどんな習慣があるか。葬儀の樣式はどうか、その後の追善供養の方式などにも色々特異のことがあらう。わが國では一般に火葬が行はれてゐるが、或地方には尙土葬のみしか行はない所もある。又墓地についても樣々で、辻井氏によれば伊賀盆地には屍體を埋葬するサンマイと、墓石を建てゝ靈を祭るハカバと二つの墓地を有するそうで、その位置の如きも地形によつて丘陵の上や川のほとりや色々あるといふ。(「地球」第十四卷第六號所載、辻井浩太郎氏「伊賀盆地に於ける墓地の地理的考察」參照) これ等は他にあまり多く例を見ない珍らしい習慣の樣に思ふが、墓地の位置については各地方樣々で、それが地形その他に重大な關係をもつてゐることは明かである。

次には一日の行事について調べよ。起床就寢の時刻はどうか。山間の村では朝寢の習慣を有することが多く、海岸の村に比べて著しく違つてゐるが、これは山が高くて日の出る時刻が後れるからである。又都會の商業區域は一般に夜晩くま

で營業するので、朝の遲いのが普通となつてゐるし、住宅區域では反對に朝早く起きて夜早く寢るのが常である。又地方によつては夏は必ず午睡をするといふ處もあるし、寢室の構造、夜具の模樣等にも特異の事實が多い。山口縣の或地方には蒲團の上に必ず莫蓙を敷いて寢る習慣があり、奥羽地方では狹い寢室に藁を敷いて置く處もある。

又娯樂にどんな事が行はれてゐるかも注意すべきことである。雪の多い地方には碁・將棋・謠曲の類が流行し、波の靜かな海岸では釣の盛に行はれる所もある。その地方に特有の娯樂と云へば、何か自然との關係を見出すべきである。都市にあつては各種娯樂機關の位置を圖示し、一ヶ月に何日開場するか、その入場人員と人口との割合等を調べ、尙物見遊山、神佛詣等の時期や場所、その間の交通機關等について調査せよ。

社會組織

今日の樣に進歩した日本の社會には、或は地域を單位として、或は職業の區別によつて、若くは地位とか階級とかによつて各種の團體や組合が出來て、その組織は限りなく複雜になつて居る。そしてそこには原因不明の地方的特色も多い。單に或一二の人の思想から出發したといふ樣な偶然的なことも少くないからである。併し又種々自然や人爲の環境の影響であることの明かなものもある。それ等は容易に他鄕の人には眞相の捉へ難いものであるから、鄕土人によつて詳しく記錄されなくてはならぬ。五人組とか鄕村制度とか、十講とか月番制度とか、講中とか迫組とか、各種の同業組合・水利組合・連鎖店・トラスト・カクテル・シンジケートなどの類、それから道普請・河普請などの樣な共同作業の制度等、何れも出來るだけ詳細に調査を要する。